
2代目勇者の災難

ごんたろう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

2代目勇者の災難

【Zコード】

Z7952P

【作者名】

ごんたろう

【あらすじ】

大陸の東側、ゲセドウル山脈から向こうには、魑魅魍魎が棲まつ魔界となっている。

その頂点に君臨するは、絶大な力を持つであろう魔王ヴェルデイルガ。

魔物退治でちょっとは名の知れた傭兵が、夢に現れた女神のお告げで、勇者に選ばれ魔王退治に行くことに！

なんで、こんなコトになつたのか。

そんな相手に相対し、果たして俺は生きて帰ることが出来るのか！？
不運な勇者のとんだ災難を描いた物語……か、どうかは読んでお確かめ下さいませ。

多少拙いかもしませんが、どうぞよろしく。

裏設定的な落書き（前書き）

2011年5月23日

10000PV突破しました^ ^

こんなに読んでくれているのかと、嬉しくて(* *)
何かしたくてしょうがない!!

もうそろそろだと分かっていたので、次話更新できればと思つて
いたんですが、気が乗らずに間に合わなかつた(T T)
何事も楽しみながらがポリシーなもので、気長に待つて下さいな。

この「裏設定的な落書き」は、何かしたくて急ぎよ上げた落書き
です。

結構な乱文で、本編に出る事は無いであらう裏設定が書き殴られ
ています。

読まなくともまったく支障はありません。

そして、そんなに面白い物でもないと思われます。

小嘶にすれば多少はおもしろかつたかも知れないですが、ほんと
に書き殴つただけです。

興味のある方だけどうぞ(*^__^*)

裏設定的な落書き

（落書き）

此處では、裏設定的な落書きを描き殴つております。

小説に出てこない細かい設定、実は結構たくさんあるんですよ
（ ネタあるんだつたら、小説に活かせよ！ ）

……活かせない未熟者なのですorz

> i21970 - 2084 <

誰だか分かるでしょうか？

ババムメレです。ひつじっ娘

個人的に気に入っているキャラとして、無性に描きたくなつた事

があつたのです。

シャーペンで描いた絵を写真に撮つて、そのままパソコンソフトで色塗りしてしまつたので、ちょっと彩度が良くなっていますが。

ババムメレは、バーン族といつ半ひつじの種族の族長をしてあります。

半ひつじなので髪は羊毛です。

バーン族は基本、村で共同生活を送り、伸ばした髪を切つて毛織物に加工し、売つて生計を立てています。

ババムメレを含むバーン族の髪は長かつたり短かつたり。バーン族にとって、髪は大切な一族の共有財産なのです。

そんな一族には、古くから伝わる恋のおまじないがありまして。片想いをしているパーン族は、髪をひと房だけ呪い用に結んだり編んだりして他のと分けて伸ばすのですよ。商品用に髪を切る時もこの髪だけは切らないでそのままにしておくんです。

それで作った物（ブレスレットやハンカチなど）を好きな人に告白時に渡すと、髪が長けりや長いだけ思いが実るといつおまじないがあつたりするのです。

それだけ長い間、君の事を想つていたんだー的なそんな感じ。

現代に置き換えると、給料三ヶ月分の指輪を贈つたとかそんな感じです。

ただ、それが長い間、君の事を想つていたんだー的なそんな感じ。

一族の中にババムメレを好きな幼馴染の男の子がいて、伸ばしに伸ばして服を作っちゃうのだけど（ それだけ長年想い続けた）、こぞり、ババムメレに渡したら、

「（他人の毛を着るのが）気持ち悪いからいらない」と、バツサリ切り捨てられてしまうとか。

こうやって、ババムメレは無邪氣な一言で相手にトラウマを『えます。

語尾とか気にしない乱文でごめんよ~。

文章書くのが苦手なのさへへ

落書きって事で大目に見てくださいな。

落書きパート2【8月17日追記】

魔界唯一の鍛冶師ロッグジェグバ・ドッドは、見た目50代ぐらいのオッサンです。

人間の鍛冶師ラグアスに師事し、剣の打ち方を学びました。

魔界の住人は、基本、強さに関して多少の自負があります。（もしくは、そんな事を気にしない超マイペース）なので、剣や槍、盾などの武具の類には関心が少なく、ドッドが造るまで魔界には武具を造る職人は皆無で武器も人間界の者が偶に流れてくる程度で、ほとんど存在しませんでした。

鍛冶師としての師匠ラグアスは人間ですが、仙人のように今でも存命中。

このラグアスのことを、師匠として尊敬し、世話になつたことを感謝し、あらゆる意味で恐れているドッドは、彼に頭が上がりません。

ラグアスは基本、人間界にいます。

現在は鍛冶師としては引退し、何処かに潜伏中。

故にドッドが魔界唯一の鍛冶師。

そして、ラグアスが打つのは名匠と呼ばれるに相応しく素晴らしい剣ですが、魔法効果などが無いといつ点では普通の剣です。

魔剣の造り手は、ドッドが史上初であり、現在、他に造れる者が居ません。

（巨人族のガギヤヒダラという兄弟が弟子志願中ですが、無下に断られています。）

魔剣に禍々しいイメージがあるのは、唯一の造り手であるドッドの趣味が悪いせい。

あまりの趣味の悪さに倦厭されますが、その効果が素晴らしい絶

大だという事で、魔界ではそこそこの値段で売れる事には売れます。
(日本円価値にして何十万単位)

そして、魔界で細々と出回っている魔剣ですが、ごく稀に（過去
数回程）、人間界に流れたことがあります。

あまりの禍々しさと魔法効果に、怪しげな趣味のコレクターやら
魔王崇拜やらの人間達には、コレクションに儀式用にと大人気。

闇オーケーションに出品されれば、何処からそんな金が？と不思議
に思う程の高値で取引されます。（日本円価値にして何十億）

闇オーケーションでこつそり取引される額なので、魔界では殆ど知
られていない事実です。
(因みに宰相は知つてます)

登場人物紹介（前書き）

本編中には出せそうにないので、こちらで容姿などを挙げときますね。

こちらを読まなくとも、本編を読むには全く支障はありません。

既に出来上がったイメージを崩したくないという方は、スルーっちゃつても大丈夫です！

もしかしたら、ネタバレ含む可能性有りなので、本編を読んでから読むのがオススメです。

登場人物紹介

（登場人物紹介）

魔王、ヴェルデイルガ・ジョセフ

金色なんだか茶色なんだか判らない髪に、オリーブ色の緑の瞳。

襟足に掛かる位のその髪は、癖毛なのか、天パなのか緩く畝つて
いる。

世界最強を誇る種族の中でも、史上最強を誇る程の魔力の持ち主
であり、癖者揃いな魔区の民を統率している最高権力者（？）。

ちょっと情けない性格だが、それを知るのは魔区の中でも一部のみ。

「襲い来る脅威！！ 危機回避の為の政策提言」の時点で既に、
約百歳の子持ち。

宰相ウイーズ・セズシルバス

透き通った色合いの薄い水色の瞳に、髪は殆ど白に近い銀髪（僅かでも光に照らされると蒼味を帯びる）。

髪は魔王と同じく長くはないが、左横の一筋だけ、肩を過ぎる程に伸ばして翡翠の石に通している。

事務仕事ばかりをしているが、実は戦闘においてもかなりの実力を持つ風使い。

記憶力が良く数字に正確で、無駄な事に時間を費やすのが余り好きではない。

プライド高く、真面目な性格。

淫魔族リーラードウ

髪色は暗めのマゼンタ、瞳は瑞々しいオレンジ色の妖艶な美女。夢の中では相手の好みの姿に変えることができる……が、そのまゝな事が多い。

男の夢に顯れては、気の済むまで（もて）遊び、イキナリ男の前から姿を消しては、その後墮ちていく様を見て満足する。

（別に、男に恨みがある訳ではない。墮ちていいく程自分に夢中になつた男を観ると、気分が良いからだ）

男好きと認識されていることが多い（確かにそうだ）が、本当の意味で愛し可愛がるのは女の子である。

基本、好き勝手に生きているが、要領が良く、仕事を任せれば的確にこなす。

愛称はリリトウ。

鍛冶師ロッグジェグバ・ドッド

髪の毛は鼠色。瞳は碧がかつた灰色。

髪と同色の口髭を生やし普段は整えているが、何かに夢中になると手入れを忘れ、無精髭となる。

世界一の腕前を持つ魔界唯一の鍛冶師である。

運が良いのか（悪いのか）希少な生物や珍しい物とのエンカウンター率が高い。

パーン族族長バパムメレ

白に近いベージュの髪に、アンバーの色の瞳で、髪は羊らしくクルンとはねているが、ふわふわしている。

（注・モコモコとはしていません。モテル羊はラッフルです。そして、瞳のアンバーは琥珀色ではなく、ミルクティーのようなまるやかな茶色。）

甘い雰囲気を持つた羊人の女の子。

アモン角有り。瞳孔は横長。

見た目、十代後半から二十代前半ころ。

服にこだわり、自分の毛で織られたファー付きのものを愛用している。

植物性ならまだいいが、他者の毛で作られた布は、素肌の上から直接には決して身に付けない。

考えてものを言つてゐるのかいないのか、時折、無邪気に心を抉る。

ババムメレの何氣ない一言にてトラウマを植え付けられた者も、数あまた……。

將軍デルクバレシス

茜色の瞳に、縦長の瞳孔。髪は山吹色。

竜人であるズメイ族の次期族長。

一族で随一の強さである彼は、本来なら族長という立場にあるはずであるが、將軍を務めているという名目のもとに父の後を継いではいない。

しかし彼は將軍としての仕事も、たまに兵士たちの相手をし、有事に多少彼らを取り纏めるのみで、日常的には本当に何もしていない。

魔法としては、火を出す事が出来るがそれだけ。卓越した剣術と馬鹿力が取り柄である。

自分より強い者と戦闘を行うと、次第に我を忘れて見境が無くなり、負けた後も七日七晩暴れまくる。

食べ物に目が無く、物事を自分に都合の良いように捉えがち。

唯我独尊。

登場人物紹介（後書き）

キャラが増え次第、順次こちらのんびり書き足します。

こんなことも知りたいといつ也要望があれば、メールでも感想でも、『じんたろう遊びやーー！

作者でも判らない」と、もしくは、ネタバレ的なもので無ければ、出来るだけお答えしますよ。

勇者の振るう聖剣ロドリゲスは、魔王の腕を切り飛ばし、その胴を抉り取る。

しかし、魔王は度重なる攻撃にも動じずに、只その笑みを深めるだけであった。

尋常ならざるもの姿に今までにない戦慄を覚える。

手応えは確かにあり、魔王は確実に手傷を負つているはずなのに、どうあっても勝てる気がしない。

募る焦燥に嫌な汗が背筋を流れた。

血らも剣を持ち相対する魔王は、こちらの攻撃を誘つよう隙を見せ、その身に攻撃を受けた。

まるで、筋道の決まつた剣舞のようだ。

罷かと考えもしたが、様子見をしたとて何が解かる？

たとえ罷だとしても、魔王の根城に乗り込み戦いを仕掛けてしまつた今、もう後戻りはできなかつた。

魔王の肉を削る度、辺りに赤い飛沫が舞い散つて、徐々に広間を染めていく。

ただひたすらに剣を振るい、いつたいどれ程の時が経つたのか。

唐突に魔王が倒れ、戦いは終焉を迎える。

精神を激しく消耗させられた2代目勇者は、さして怪我もないのに地に倒れ伏した。

本当にこれで魔王は死んだのか？

胸の内に残る不安からは田を逸らじ、勇者と呼ばれた男はその意識を手放した。

勇者が気づけばそこは祖国エレニアの辺境だった。

その後、魔王を相手に勝利して、無傷で生還を果たしたその勇者の逸話は、聖エレニア国の伝承国書に記載され、子供の寝物語として多くの者たちに語り継がれた。

歌劇や絵画の題材としても取り上げられ、この世界に彼の勇者の

名前を知らぬ者は無い。

しかし、彼自らが、魔界での出来事を語ることは、生涯を通じてなかつたといつ。

ただ国王に、魔王を倒したことの報告をしたのみだ。

それ故、人々の関心はさらに高まり、そのたくましい想像力に話は豊かに膨れ上がるのだった。

女神に授けられし彼の聖剣は、神殿に奉納されて、この後何百年も大切に保管された。

神殿を参拝した人は、伝説の【勇者の剣】に感嘆の溜め息を零し、おどぎ話の中に伝わる魔王と勇者の壮絶な戦いに想いを馳せる。

勇者はどんな思いで、魔王に立ち向かつて行つたのか？

魔王に打ち勝つ勇者の力は、如何ほどのものであろうかと。

与えられた役目を果たして地に伏した男を、魔区外に送る。

当初の予定通りに、男の身体にはかすり傷一つなかつたが、その顔には苦悶が浮かび、思わず同情を禁じ得ない。

扉が広く開け放たれ、解放された謁見の間。

標準人間型で考えて、収容人数100000人規模のこの大広間は、この日のために価値ある調度品が全て片付けられ、実に広々としている。

魔区で宰相を務めるセズシルバスは、ゆっくりとその広間に視線を通した。

床に多少の傷はついたが、破損といえる破損は特に見受けられない。

唯、床に敷かれた絨毯だけは魔王の血肉と臓物で汚れてしまった。

安物に代えていて良かつたと喜びたいところだが、これだけの損害でも経理担当の財務長官から文句を言われる事だろう。

まったく、迷惑この上ない。

軽く嘆息すると床に散らばる魔王を見遣やる。

人間たちの間で魔界と呼ばれる此処、魔区は、大陸の東側に位置し、魔区外、つまり人間たちの住む地域とは、山脈によつて区切られ分かたれている。

そこでは、魔族と呼ばれる異能異形の者たちによつて、ひとつの王国のような体裁をとつていた。

その魔区一帯を統括する世界最強種族の現魔王は、歴代魔王の中でも随一の魔力を誇り、強さと手腕ゆえに魔区中の魔族から尊崇と憧憬を集めている。

そんな魔王が、今はただの肉塊と化してそこいらに転がり、床を汚して汚している！

嗚呼、此れを他の者が見たら何と思つことか！？

人一倍、真面目でプライド高い魔界の宰相セズシルバスは、己の仕える魔王の無残な現状をそこそこに嘆くと、片手で空を軽く払つた。

途端、巻き上げるような風が起つり、魔王の腕やら内臓やら、そこそこに散らばった肉片を一ヶ所に集めていく。

セズシルバスは、更にそこに魔法をかけ、適当に癒すことで魔王の体をくつつけた。

誰が見ても、死骸だろうと判じるような有様で、切り裂かれた無数の傷はそのままだつたが、一通り魔王の破片をくつつけたところで、癒すのを止め、風の魔法で王の寝室へと転移させる。

あれで死なないというのだから、魔王の生命力とは恐ろしいものである。

しかし、一週間は政務にも使えないかも知れない。

その心づもりで、ここ一年程は魔王を執務室に閉じ込め、朝も昼も夜も関係なく限界まで仕事をさせて、例え限界がきても軽く癒して続けさせてきたが……。

万一、私の仕事がこれ以上増えるようなら、回復後にこれまでの三倍は働かせて一年の有給休暇をとつてやる。

冷めた目をして静かに決意を固めた魔界の宰相セズシルバスは、血で汚れた謁見の間を後にした。

プレリュードは魔界より

事の発端は、パーン族の族長ババムメレの一言にあった。

およそ三年前の出来事である。

「魔王さまって、力の成長なかなか終わんないね。そのつち体の方が破裂しちやつたりして~」

ふふっと無邪気に笑うババムメレ。

一年、二年、魔区に住まう各部族の族長が、それぞれに行う部族報告。

その報告後、帰り際にふと思いついたように振り返った彼女は、そんな言葉を口にした。

羊らしくクルンとカールした自らの髪を指先で弄ぶと、じゃあね～といつて扉に向かつ。

衝撃に固まる魔王をそのままに謁見の間を出て行つた。

静まり返る謁見の間。

「や、そんな……！」と、ある訳な……よ、な？」

しばらくの後、上ずつた声で訊ねてきた魔王に目を向けると、玉座に居るにも拘らずに顔を青褪めさせて不安そうに見上げてきた。

魔王の威厳は何処へやら。

魔区の民は、普通の人間とは一風変わった異形異能の者たちである。

ただ単に、獣の姿が混じつただけの者もいれば、人には過ぎる怪力や摩訶不思議な魔法操る能力をその身に宿した者もいる。

多種多様な姿と力を持つ魔区の民はその習慣も様々で、似たような者たちで集まって形成した部族を基本にして生活をしていた。

魔王をはじめとする魔城の者たちは、魔区の民のまとめ役であり、魔区内の治安維持や部族間のございの仲裁等を仕事にしているのである。

何はともあれ、先にババムメレが言つた力の成長。

それは、魔力の器の成長を指している。

魔区の民の中でも魔法を操る者たちは、その身に魔力を宿し、身体の成長　人間で言う所の第一次成長と第二次成長が終わると、第三次成長としてその身に宿す魔力量の成長が見られる。

俗に「力の成長」と言われるそれは、種族によってその期間は異なるが、概ねゆつたりと200～300年ほどで終了し、その身に宿す事の出来る魔力の絶対値が決まる。

体力と同じように、魔力は魔法を使えば消耗し、酷使すれば死ぬこともある。
己の魔力量の絶対値を超える魔法は、何らかの補助なしには使う事ができない。

魔力量の絶対値が高ければ高い程、容易に魔法が扱えるというわけではないが、一度扱いを覚えればその力は計り知れないものである。

歴代魔王の中でも随一の魔力を誇る現魔王は、525年前から魔力の成長が見られ、その成長スピードは未だ衰える事を知らない。

魔力量の成長は、魔法を扱う者にとって喜ばしいものではあるが、現魔王のそれは確かに異常と言えた。

「そうですね。確かに貴方のそれは異常と言えるでしょう。魔力量の成長過多による身体破裂などという事象は、今まで報告された例はありませんが、通常200～300年ほどで終了するはずのものが、525年、となると有り得ないとは言えません」

誰よりも抜きん出た魔力量を保持する魔王には、その側近を務める私ですら足元にも及ばない。

それ故、政務から逃げた魔王を追跡・捕獲・強制連行し、執務机に固定しておくにも、魔力量に物を言わせて抗われたならば敵うはずも無く、私が魔王の分まで仕事をこなす事になるのだ。

現魔王の魔力成長が異常なことも、魔力量の成長過多による身体破裂が、今まで例に無くとも有り得ない事ではない、ということも嘘ではないが、田代の鬱憤を晴らし、たさやかな灸をする為に主君を少々威す事くらいしてもいいだろ？

一層顔色を無くした己の上司に満足しつつ、茫然自失となつた魔王を執務室へと追い立てた。

己の仕える王がこれまでになく強いといつのは誇らしいが、太刀打ち出来ないのは厄介だ。

成長などというものは、己の意思でどうなるものではないが、精神的圧迫で少しは抑圧されるかも知れない。

魔界の宰相セズシルバスは、この時の発言と安易な考え方、此のち幾度も後悔した……。

襲い来る脅威！！ 危機回避の為の政策提言 Act・1

朝、登城を果たしていつものように執務室前へと転移した。

ノックをして名乗るとすぐに、入れとの声がかかる。

「セズシルバス！」

中に入ると挨拶をする暇もなく名を呼ばれる。

顔を上げるといつになく真剣な顔をした魔王ジョセフがそこにいた。

「一戦頼む。俺を痛めつけてくれっ！－！」

数日、青褪めた顔をして言われるまま仕事をこなしていた魔王は、改まった態度でそう言った。

魔法を扱う者たちには、その身のどこかに魔力を溜める器があるとされている。

その大きさは、個体差があり器を満たす魔力の量がその者の最大魔力量なのだ。

魔力の器の成長は、その内にある魔力が満たされ、さらに膨れ上

がる事によつて、内側から押し延ばされるよつにして為される。

吹きガラスのようなものだ。

魔力が満たされていなければ、吹き込むのをやめた。ガラスのよう
に、その器は膨らむ事をしない。

魔力の器が成長する第三次成長期に入つた者たちは、なるべく魔
力を消費しないようにするのが常だつた。

魔王ジョセフはそれを逆手に取つたのである。

魔力を手つ取り早く消耗するには、魔法による激しい戦闘を行
い重傷に陥るのが一番だ。

魔力を持たないものは、体内物質の機能や薬によつて怪我や病を
治すが、魔力を持つ者たちは、意識のあるなしに関わらず、魔力が
消費され傷が癒えていく。

魔力の成長を抑えるための解決策としては、一番問題が無く効果
的な手法だ。

魔力の成長期間そのものを終わらせる術は、いまだ解明されてい
ない。

……といつより、そんなことを望む者はこれまでの歴史の中に存在
せず、魔力の成長期間を終わらせたいと発想する者すら居なかつた
だろう。

他の手段としては、魔力を際限なく食らう食魔類の動植物を引つ付けておく、城の研究者に研究テーマとして提示し、早急な解明を要請する等があるが、どれも問題がありすぎる。

魔王の馬鹿馬鹿しい不安を露呈する訳にもいかず、戦闘相手としては私が一番妥当だが……、

「お断り致します」

即座に発せられた簡潔な一言に、魔王が絶句する。

「当たり前でしょ。貴方を瀕死にさせる為に一体どれだけの魔力と時間を浪費すると思っているんですか。貴方の些細な不安を一時的に解消するために、魔区のまとめ役が一人揃つて幾日も使い物にならなくなつたら、どれだけの仕事が溜まるか分かつてます？決裁と指示が遅れれば、それだけ下の者の仕事も滞るんですよ？まあ、私に仕事を押し付けてサボりがちな貴方には分からぬかもしけませんが」

魔王がぐつと呻くも反論する。

「おまえが、仕事のしそぎなんだ。普通の人間と違つて寿命も長いんだし、そんなに生き急ぐ事もないだろ？」

「そう言つて、先代、先先代、とそれ以前も一書類仕事をサボつた魔王たちのおかげで、内諾のみで橋の建築や道路建設、果ては街の増設がなされ、魔区の中核であるこの魔城に、資料の欠片すら、存

在しません！魔区をまとめ、指示する側に、区域を把握するための資料が無いんですよ…どれだけ凶々しき事態なのか、お分かりですか！？」

すぐに返されたその答えに、今度は呻く事も出来なかつた。

襲い来る脅威！！ 危機回避の為の政策提言 Act・2

その翌日の朝も、登城を果たしていつものように執務室前へと転移した。

ノックをして名乗るとすぐ、「入れとの声がかかる。

「セズシルバス！」

中に入ると挨拶をする暇もなく名を呼ばれた。

顔を上げるとこにくなぐなく自信に満ち溢れた顔の魔王ジヨセフ
がそこにいる。

「兵士の、訓練相手を引き受けたといつのはどうだろ？」

語尾は疑問形で上がり調子になつてはいたが、断られるはずも無い良案だとでも囁ひよつて、どこかフフンと自慢げだ。

宰相セズシルバスは、その顔にムカつきを覚えるよりも呆れ果てた。

「どうせいつもありません。そんなこと、認められるはずが無いでしょ。貴方の相手が出来る程のものは訓練などに参加してはおりません。貴方は、魔区の治安を守る兵士たちを潰す気ですか？」

寸分の間も無く返された言葉に、敢無く魔王の自信は撃沈した。

訓練場の兵士たちに『的』として提供するのが、日々の業務に一番差し障りのない方法ではあるが、例え、簾巻きにでもして素性を隠したとしても、攻撃を受けていればいづれ簾巻きの皮は剥がれる。

仕える主に幻滅し、気味悪がつて城を去っていく者も出るかもしない。

そう内心で結論付けた魔界の宰相セズシルバスは、その日も仕事を取り掛かっていった。

襲い来る脅威！！ 危機回避の為の政策提言 Act .3

さらにその翌朝も、登城を果たしていつものように執務室前へと転移した。

ノックをして名乗るとすぐに、入れとの声がかかる。

「セズシルバス！」
「却下です」

中に入ると挨拶をする暇もなく名を呼ばれたが、何か言われる前に即応した。

今日は礼も取っていないが気にする魔王ではない。

「ま、まだ何も言つてないじゃ ないかっ！…」

「どうせ碌な事は言いません」

「断言ツー…?」

「そんなことより、早く仕事を始めましょう。今日は謁見がございませんので、これらの書類に認可のサインと……」

言いながら、腕を軽く振った魔界の宰相セズシルバスは、転移魔法でどこから発生させたのか、書類で部屋中を埋め尽くした。

「……待つて…？ちよつと待つてくれ…！」

何時にもない大量の書類に、青褪めた顔で慌てて宰相の言葉を遮る。

「三度田の正直と言つだらう…へちよつとでいいから話を聞いてくれっ…！」

切羽詰まつた面持ちで、執務机から立ち上がってまで訴える魔王に嘆息しながらも応と返す。

「それで、今度は何ですか？」

その言葉にガバッと顔を上げ、嬉々として話しだした魔王の案

「食魔植物を育てるんだ…！」

その案に、魔界の宰相セズシルバスは厭われるよりも憐れみを覚えた。

「魔王陛下？」

慈愛に満ちた微笑みと優しい声音で魔王を諭すことにする。

この魔王に接するには赤子に接するよりも強い忍耐が必要とするのだろう。

魔王ジョセフは固まつた。

「食魔植物をはじめとする食魔類がどんなものかは、ご存じの筈ですね？」

声を出す事も出来ずに、コクコクと首を縦に振る魔王。

「彼らは、それぞれの種別により異なりますが、食らつた魔力に応じて、巨大化、凶暴化、大量繁殖を致します」

声を出す事も出来ず、ブンブンと首を縦に振る魔王。

「歴史上、最大の魔力量を誇る魔王ヴェルデイルガ・ジョセフ陛下は、一般魔族の平均魔力量と比べ、現時点で50倍ほどの魔力量があります。平均値の魔力量を持つ一般魔族が10人程食われただけで、小さな島一つ沈める程に巨大化する食魔植物キエムガドを、陛下直々に育て上げればどうなるんでしょうね？」

魔王は俯き、優しげな笑みを浮かべる宰相の顔からそっと視線を逸らす事で、殺意を纏つて鋭く伸びる爪先を見つけた。

「考え込むことも無く、次々と画期的な案を出される魔王陛下はすごいですね」

考え無しにクダラナイ案を出せるとは、貴方の頭は空っぽですか？すごいですね。そんな恥さらしな真似は、私には到底できません。

身動き一つなく宰相の言葉を聞いていた魔王に、それはそんな風に聞こえた。

「今度からは、口に出す前に、それを実行に移したらどうなるのかを、よく、考えてみましょう」

物分かりの悪い子供に、囁んで言い含めるように、一言一言、区切って話すセズシルバスの柔らかい声が耳に入る。

恐る恐る窺えば、相変わらず、慈愛溢れる笑みを浮かべる魔界の宰相セズシルバス。

微笑みの下に隠されながらも、渦を巻いて確かに存在する何かを察して、その日から、魔王は言われるがままに、自発的に仕事した。

襲い来る脅威！！ 危機回避の為の政策提言 Act・4

書類にきちんと印を通して、サインをしながら、ふと思ひ。

城の研究者たちに魔力の成長期間を終わらせる方法を、解説されれば良いのではないか？

多少時間はかかるだろうが、優秀な研究者ばかりだからきっとこの悩みも解決するに違いない。

「セズシル……」

「何でしちつ？」

勢い良く宰相を振りかえって、名前を呼び掛けた途端に印にした微笑みに、何でも無いと反射で謝った。

次の書類に印を通す。

考え方。

そんなこと、セズが思いつかない訳がない。

折り良くも、印にした書類は、研究者たちからの研究費予算増案書に対する廃案書……。

魔王は自分の反射に感謝した。

数日後の朝、魔界の宰相セズシルバスは、登城を果たしていくものように執務室前へと転移した。

ノックをして名乗るとすぐに、入れとの声がかかる。

「セズシルバス！」

中に入ると挨拶をする暇もなく名を呼ばれた。

またか……。

面倒臭さに魔界の宰相セズシルバスは、思わず舌打ちをしたくなつた。

「セズシルバス！勇者を招くぞ！」

自信を粉々に打ち碎かれ、数日、言われるがままに仕事をこなしていた魔王陛下は、希望に瞳を輝かせ、そう宣つた。

魔王の手元には一冊の絵本……。

魔区外のものと思われるその絵本には、少し離れたこの位置からでも読める程に、『テカデカとした太文字で、

『勇者の冒険～女神の守護と魔王退治の旅～』

と、書かれていた……。

襲い来る脅威!! 危機回避の為の政策提言 Act・4（後書き）

これで、政策提言シリーズは終わりです。

お楽しみ頂けたでしょうか？

4つセットで、リズムと勢いで書いた（つもりな）ので、4つ通して読んでもうれしい嬉しいです。

特に何が変わるとこつ訳ではないけれど……。

暇で死ぬといつ方は、お暇潰しに是非トライをつーーー！

次回は、面子を増やしてお茶会になります。

茶会の集い（制限時間は60分） 前編

【第一回、魔王による魔王の為の勇者プロトコース企画議会】

魔王の私的な応接室には、そんな横断幕が掲げられていた。

「手書きだねえ~」

「ええ、手書きねえ」

パン族の長ババムメレの言に応じたのは、淫魔族のリーリートウである。

彼女らは、まるでありふれた天気の話でもするかの様に、その横断幕を見上げていた。

繰り返すが、此処は世界最強を誇り、恐怖と尊敬でもって魔界を治める魔王陛下の居室の内の一部屋である。

その他にもこの部屋には、魔区内の錚々たる顔ぶれが集っていた。

「なあ、腹減つてんだけど、飯ないのか?」

全員魔王の顔なじみであり、こんな馬鹿げた魔王の計画を知らされても帰つてくる反応と言えばこんなものである。

部屋に集う人々は、華奢な細工が施された美術品とも言えるテーブルを囲み座っている。

それぞれに紅茶と茶菓子が配されており、テーブルの中央にも大皿が5枚程、焼き菓子を盛り並べられていたが……。

席が埋まつて5分と経たずに5枚の皿は空いていた。

魔王は紅茶で口を濡らせ、受け皿にティーカップを戻す。
立ち上がりて口上を述べ始めた。

「えへ、ではこれより、第一回、魔王による魔王の為の

「陛下、私はこの一時間のみと、申し上げた筈ですが」

応接セットの一人掛けソファーから立ち上がり、開会宣言を始めた魔王に釘を刺す。

「一回目以降の開催を、許した覚えはありませんよ?もちろん、分かつていらっしゃいますよね?」

「……はい」

「それなら結構。じつでお続けください」

促された魔王は、宰相の顔色を窺いつつ会議の進行を始めた。

「え、え、では、これより、第一回、魔王による魔王の」

「ねえ、メンンド臭いし、始めるなうひとと始めたちやつてくれない？」

少々甘めの幼い声でババムメレが言つ。

彼女は小首を傾げながら魔王を見上げてそう言つと、早くも興味を失ったのか、視線を落とし、胸元のファーを指先で摘まんで弄りだした。

クルリと毛羽立つ羊毛のファーは、羊人であるババムメレの髪質と全く違わない。

その性質の半分は羊であるところに、元のわざの露出の多さだった。

「渡された資料に一応目を通しましたが、一体、何を話しあつといつんだ？」

「筋書きは決まっていくようだから、配役を決めるんじゃない？」

「飯ねえのかつて聞いてんのによ」

「？」

それぞれ、好き勝手に話し合ひ俄か議員たちに魔王は涙目になつた。

「残り時間は45分です」

無情に響く冷徹な宰相のカウントに、慌てて氣を取り戻す。

「さあ、聞いてくれえ！」

もはや威厳も何もない。

情けない大声に静まり返つた隙を逃さず魔王は一息に言いたてた。

「第一回、魔王による魔王の為の勇者プロデュース企画議会を始める！議長と進行はこの私魔王ヴェルデイルガ・ジョセフが務める！会議の開催意図はこうだ！この私、魔王ヴェルデイルガ・ジョセフの第三次成長がなかなか終わらず、魔力の器は膨れ上がるばかり！このままでは私が爆発してしまう恐れがあり、成長を抑えるために戦闘により重傷を負いたい！そのため、魔区外から勇者を立ち上げることになつたので、諸君らには協力を要、請す……」

息が切れ、ぜいぜいと呼吸を繰り返す魔王を余所に、各自勝手に喋り始める。

「うわ～、あれ信じたんだ～」

「おまえが原因かよ」

「アンタ、資料は見なかつたのか？」

ババムメレの一言に、竜人である魔区の將軍デルクバレスが投げやりに呟つ。

魔界の鍛冶師ロッグジエグバ・ドッヂの間に、ババムメレは笑つて答えた。

「見ないよ～。読んでもつまんなさそつだつたし」

「あらあ、あれはあれで面白かつたわよ～？大真面目にこんな事を考えてえ、せつせと資料を用意している魔王サマを想像するとお。フフッ」

妖艶な美女姿の淫魔族リーリートウは、ついていた頬杖を解くと魔王を見上げて問いかけた。

「ねえ、魔王サマあ？役を決めるのなら私、勇者の口の夢に現れる女神の役がいいわあ。淫魔族なのだし、夢に現れるのはお手の物よお？」

甘い誘惑で唆すように紅い唇が言の音を紡いだ。

「だ、駄目だ！女神は既にババムメレに決まつてゐる。リーリートウは魔区外に行つて、一番強くて体力のありそうなやつを探してくれ

「えへ、そんなの、つまんないわあ」

「めんどうくわーい

「いいから一決まりつ！…」

女性陣から上がったブーケイングに詠みそうになリながらも、魔王は言い切つた。

「ロッグジエグバは、勇者の攻撃力を上げる聖剣の製作！デルクは勇者の案内役兼鍛え役な！」

それぞれの顔を振り向き、役を振つていく魔王にまたもや文句が上がつた。

「俺あ、聖剣なんぞといつもんは造れんぞ」

「オレもめんどいからパス

「パス！？』も』つて何！？みんなやつてくれないのつ！？」

テンparる魔王に頷き返す一同。

魔王は縋る思いで宰相に視線を向けた。

「まあ、見返りも無く、くだらない計画に付き合つゝな者は、この場にはいませんからね」

当然のことだと、魔界の宰相セズシルバスは、言葉にされずとも明らかに伝わる魔王の救難信号をスルーした。

「あと、34分56秒」

宰相の眩きに背筋を伸ばし、必死といった面持ちで、打開策を練る魔王。

焦点の合わない瞳を机に向けて、じつと俯く魔王ジョセフ・リー・リートウは問いかける。

「ね～え？ 魔王さまあ、私、女神役ならやつてもいいのよお？」

唯一、協力を仄めかすリーリー・リートウを見上げ、魔王の瞳が葛藤に揺らめく。

暫しの逡巡の後、やつぱり駄目だと首を横に振った。

「おまえに女神をやらせたら、絶対、勇者を誘惑するだろ？」

「そうねえ、淫魔族たるものお、他人の夢に入つたら、墮とせなきやあダメなのよお？」

「これから鍛え上げて私と戦わせようといつて、元のつこいつにして堕させたら戦意も何もないだろ？」

「あ～ん、やう言えばやうねえ～

はあ～～と深いため息をつく魔王。

「そつかあ～。そうよねえ～、しょうがないわよねえ。じゃ～あ、勇者見つけるの、協力してあげようかしらあ～。いい男探しのついでにい、チョット訊くだけだしねえ」

その言葉に、魔王ヴェルティルガはガバリと顔をあげると、感動の涙を流して嗚咽混じりに感謝した。

みつともない魔王に、魔界の宰相セズシルバスは嘆息する。

「こんなこと、さほど時間を掛ける事など無いだろ?」……。

アザミの花の描かれた白の陶器を眺めやり、その纖細な美しさに、暫し心を落ち着かせる。

カップの内で揺れているのは、淡い蜜色の光を灯すガーネットの様な紅いお茶。

口をつければ、それは既に冷めていた。

一時間は猶予をやつて、魔王の好きにわかる気だったが、余りの情けなさに見てられない。

懐中時計を開いて見れば、開始から、36分28秒が過ぎている。

「じきなことで過ぎてく時間も惜しかった。

何より、口に仕えているかと思つと、口のプライド的にも耐えがたい。

セズシルバスは、魔界唯一の鍛冶師であるロッグジエグバ・ドッドに顔を向けると、静かに簡潔に言い放つた。

「ドッド、聖剣とはいっても、取り敢えずそれらしい物を作つて頂ければかまいません。通常の発注と同じく代金は支払いましょう」

「おっ、それなら任しとけ！」

次に、魔区の将軍デルクバレシスに目を向ける。

「デルクバレシス、魔区外には、魔区には無い美味しい料理や珍味があると聞きます。勇者を魔区まで案内する旅の資金は、陛下が出しましょ！」

「おっ、やうなのか？それなら協力してやる

デルクの了解を得ると、パパムメレに視線を移した。

「パパムメレ、協力して下さるのなら、ラタトスク族のジェーデクをひと用貸します。好きにして頂いて構いません

「ホントー? やるつー!」

一分もかけずに協力を取り付けた宰相に、顎を外しているのではないかと疑がわれるような間抜け面で、魔王はぽかんと放心した。

「これでいいでしょ? 他に無ければ解散して執務に戻りますよ、陛下」

「あ、ああ」

魔王ジョセフが頷くと、拍子抜けしたように、ロッグジョエグバが椅子の背に凭れた。

「なんだ、これで終わりなのか? 誰に何をやらせるか決まっているなら、会議にする必要ないだろ?」

「ホントだよね~」

「飯も出ねえしな!」

口々にこうつと、皆、席を立つて扉に向かつ。

彼らが、この茶会の意図を知るのは、その数分後。

それぞれ、逃げていた仕事や相手に、偶然にも、この広大な魔王城の中で遭遇し、向き合わざるを得なくなつてからだつた。

……魔界の宰相セズシルバスが、無駄に付き合つ訳がない。

茶会の集い（制限時間は60分） 後編（後書き）

PVせーーん！！

なんと、プレビューが1000アクセスを越えました！

プレビュー、皆さん知っています？

私が、つい最近までよく知らなかつたのですが、
(なんとなく、多いと凄い)といふことは分かつてましたよーーー)

ページが捲られた回数の事だそつです！

この私が書いた小説に、飽きずに続きを覗きに来るリピーターさんが居る模様。

浮かれ気分で続きを投稿しちゃいました

因みにこの投稿で1万文字も突破！！

作文苦手だからこんなに書いたの初めてだ。

遊び女の品定め 演じる役者は一枚目? (前書き)

私事になりますが、明日17日、卒論の提出締め切りなんです。

そして、まだ終わってません……。

という訳で、これを読んだ方は、もれなく、私の「卒論提出締め切り前達成」をお祈りくださいね。

因みに、この「品定め」は前に書いておいたストックで、締め切り前の最近、書いていた訳ではないですよー。

遊び女の品定め 演じる役者は一枚目?

商の国サンマルチエッタ。

魔国外にあたる大陸の西側。

その中心にあるサンマルチエッタ国は、整備された交易路で近隣各國と繋がっており、商の国との呼び名に相応しく、商業盛んでじこも人気に溢れていた。

どの街も、行商人や旅人たち、馬や馬車が行き交つて、常に活気に満ちている。

それは、夜も深まるこの時間でも変わらない。

歓楽街のある一軒の酒場でも、何時ものよつて醉客たちが騒ぎ、だみ声や笑い声で賑わっていた。

店内は、所々に吊るされたランプの明かりで照らされており、煉瓦造りの埃っぽさが酒の匂いに紛れている。

そんな店の片隅で、酒を片手にじっとしている客が一人。

店内だといふにも関わらず、外套を着たままフードを田深にかぶっているその客は、フードの奥から静かに、他の客たちを観察する……という訳でもなく、そつと、悩ましげな溜め息を吐いた。

「ふう、どうしようかしらあ？」

野暮つたい灰色をした外套の中で、組んだ足を組みかえる。

白く滑らかな細い足が、チラリと覗くが、ここは一番目立たぬ店の隅。

加えて、テーブルの下であることから、気付いた者は誰もいない。隅のテーブルの陰気な怪しげフード野郎が、絶世の美女とも言つべき妖艶な女だという事実にも、誰も気が付かないのだ。

一つ手前のテーブルでは、酔った男の集団が、酒樽を抱いて寂しい一人身を嘆いていた。

今夜は、あの口達の所に行こうかしら。

少し前からこの店にいる淫魔族のリーリートウは、酒の杯を少し傾け、舐めるよつにちびりと飲んだ。

チョット訊いてまわるだけで、すぐに終わると思つてたのに
なあ。

魔王サマから勇者探しを引き受けた三日。

勇者探しは思いもかけず難航していた。

リーリートウが、「強い男を探しているのぉ、知らないかしら？」と尋ねると、皆そろって自分だと言い張るのだ。

数人かち合つた時に、言い争いから喧嘩に発展していくが、てんで弱くて白口申告はあてにはできない。

仕方が無いので自分で情報収集をしようとしたが、いつして酒場の噂に耳を傾けていたのである。

因みに、リーリートウが「強い人間」ではなく「強い男」と、男限定で探しているのは何も男好きだからではない。

女が弱いと思っている訳でもなく、リーリートウは最初から、男限定で勇者を探していた。

例え世界一強い人間が女性だったとしても、リーリートウはあくまで男を勇者に選ぶ。

その理由を彼女に聞えば、きっとこう答えるだろう。

可愛い女の子にい、あの陛下の相手をさせるなんて可哀想じやない。

男好きとは名を馳せながら、彼女の男に対する扱いは、結構酷いものだった。

何気に、慕つてゐるはずの魔王陛下に対する認識の酷さまで露呈されているのは、じ愛敬である。

彼女に悪気は一切なかつた。

此所、商の国は周辺各国を繋ぐ道筋が交差し、多くの行商人や旅人があちこちから集まつては去つていく中継地ともなつていた。

旅の不安や危険をわずかでも減らすべく、情報交換をする彼らのお陰で、行き交う噂は国の垣根を越えて世界規模だ（魔区を除く）。

世界規模で強い人間（男）を探すなら、此所で情報を得るのが一番良いだろう。

粗い木製テーブルに、頬杖ついて溜め息を吐く。

田の前に掲げた杯は、未だ幾らも減つてはいない。

苦味の残る価格の安い白酒は余り好きではなかつたが、普段口にする様な甘い極上の酒なんて、個室も無く噂話が聞こえるような、こんな酒場においてはいない。

リーリートウは酒場の会話を耳を傾け、また一口と、酒を含んだ。

杯が空になり、店員の女の子に2杯目を頼むと、かわいい笑顔で応じてくれた。

高めに結んだ茶色の癖毛を、可愛く揺らしていく。

その背中を見送りつつ、気安く応じた勇者探しの前途多難に、リーフトウは幾度目かの溜め息を、深く深く吐くのであった。

遊び女の品定め 演じる役者は一枚目？

届いた2杯目の酒に口付けた時、入口のベルがカラーンと鳴って、新たな客がやってきた。

現れたのは栗色の髪をしたまだ若々しい青年で、若草色の瞳がさわやかな印象を与える。

均整の取れた体つきをしており、しつかり筋肉もついている。腰には剣を帯びていた。

「よつ！久しぶり」

声もちょっと低めでかつていい。

リーリートウは、うつとりと彼を見つめると、酒の入った器をテーブルの上に置く。

彼は、先に来ていた仲間たちを見つけ、斜め前のテーブルに着いた。

しばらく、彼を眺めていると仲間の男が気になる事を口にした。

「おまえ、Hレニア国 の武術大会で優勝したんだって？」

栗色の髪の青年が、呆れたように言葉を返す。

「おまえは、相変わらず耳が早いな」

「おっ、認めやがったか。ば～か、大国Hレニアの武術大会で優勝
つづいたら、そこらのおばちゃんに『だつて名前が知れてるツツの

「よつー世界一ツー。」

「あそこの大會、優勝賞金、いくらだったっけえ？」

「よつしゅ、今日はお前の奢りなーー。」

その話題に他の男たちも乗つかつて、声を張り上げ盛り上がる。

栗色の髪の青年は、苦笑しつつも觀念して、今日の酒代を払ふ
けることを了承していた。

Hレニア國と書つたら、この國の北東に位置する大國である。

魔国外にたびたび遊びに来ていたリーリートウも、その大会を知
つていた。

むくつけき男たちの集まる祭りと聞いて、何度か見に行つた事さ
えある。

かなり規模の大きな大会で、他国からも人が集まり三日をかけて優勝者を決めていた。

魔王サマの足元どころか宰相のセズシルバスにも届かないであろうが、その大会の優勝者たちは確かに、人間にしては強かつた。

あれくらいならあ、魔王サマも満足かもしれないわねえ。

このまま、何日も情報収集が続くかと思われていた矢先、思わずどこひで発見した有望株に、リーリートウは目を輝かせる。

その時、店内に短く悲鳴が上がった。

「や、やめてくださいっ！…」

店の中央で、先ほどの店員の女の子が酔っ払いに絡まれているようだった。

「いいじゃねえかよお、ちつとへりー。減るもんじゃねえだろ？が

そう言つて、酔っ払いの男が尚も女の子のお尻に触る。

その腕を、いつの間に移動したのか、栗色の髪の青年が、掴んで止めた。

「嫌がつているでしょ？やめたひびつなんですか？」

「ああ？なんだ、文句でもあんのかあ？手え、放せつ！！」

そういうて男は、青年の腕を振り払つて殴りかかる。

青年はそれを軽く避けた。

店内の中央に、荒れそつた雰囲気を察した客たちが、早々に壁際
に避難する。

一人の周囲が開け、こちらからも見やすくなつた。

リーリートウは、騒ぎの中心となつた、その彼をじっと見つめる。

相手の胸ぐらを掴む太い腕、がつしりとした肩幅、腰にある重そ
うな太い長剣へと、視線をずらしてじっくりと眺める。

揉み合いで肌蹴た胸板は、思ったよりも逞しかつた。

体力ありそだしい、結構強いみたいだしい。

「決めてたつ。彼にしようと」

リーリートウは頗も軽やかにそつぱいつと、勘定を残して、そつと
消えた。

遊び女の品定め 演じる役者は一枚目? (後書き)

私事になりますが、卒論の提出締め切りが今日だったんですね。

祈ってくれた方、

ありがとうございます!!

無事に締め切りに間に合いました!!

一寸、絶望的だったのですが、
きっと祈ってくれた方のなかに魔法を使える奇特な方が居たのでし
ょう。

何はともあれ、皆さんに感謝です。o(> - <) o

遊び女の品定め 演じる役者は三枚目？

お茶会から4日目の朝、魔王城に、紅い薔薇の封蝋が押された黒い封筒が届けられる。

特徴的なその手紙はリーリートウからのもので、それは魔王に宛てられていた。

魔王ジョセフが肉を前にした仔犬の如く、目を輝かせてそれに飛びついたのは言うまでもない事かもしれないが、朝に届いたその手紙を、魔王陛下が封切つたのは、夜も遅くの深夜を過ぎて、朝日も昇ろつかというそんな時刻だった。

朝、一日でリーリートウからと分かるその手紙を片手に持つて、やつて来たのは魔界の宰相ゼズシルバスだつた。

傍聴にも分かりやすく反応を示した魔王陛下に、彼は言つ。

「陛下、リーリートウから今朝、手紙が届いておりましたが」

飛びつく勢いで執務机から駆け寄つた魔王陛下に、尚も続ける。

「此処3日程、心此処にあらずといった体で、文字をまともに見る事すらも出来なかつた陛下には、手紙を読むなどといつ高度なテク

「ツクは、もちろん、備わってはいませんよね？仕方が無いので、これは私が預からせて頂きます」

こうして魔王は、人参を田の前に吊るされた馬車馬の如く、働く事になったのである。

4日分の仕事を一昼夜で終わらせたその執念は、常に、仕事に対して発揮して欲しいものだ。

魔界の宰相セズシルバスは、大した期待も込めずに、心の中でそつぼやいた。

手紙の中身は予測の通り、勇者の決定通知とその特徴についてであるらしかった。

人間にしては結構強く、体力がありそうとのことだ。

四六時中、遊び回っている様でいて、リーリートウは昔から、仕事が早くて的確である。

あの4人の中で唯一、まともな仕事が出来る者として、宰相の中では印象が良かつた。

頼みもしないのに、興奮気味に内容を伝えてくる魔王によれば、

勇者は、エレニニア国の武術大会で5回の出場経験があり、毎回上位3位以内に入るつわものらしい。

傭兵を生業にしており、その強さは、魔国外では結構有名なのだそうだ。

がつしづとした肩に太い腕をした男で、腰に帯びた太めの長剣を扱っている。

利き手は右だが、左でも剣を振るえるよう鍛えた節があり、無手でもそこそこ戦えるらしい。

魔術の類の素養は無し。

逞しい胸板は好みだが、少々ガニ股なのが頂けない。

茶色の髪に焦げ茶の瞳の31歳、独身男。

と、いった者に勇者は決まつたようである。

ガニ股という点において、リーリートゥ同様、少々不服を感じたよつではあるものの、許容範囲であつたらしい。

魔王は早速、勇者の特徴を伝えんと、ロッグジエグバに手紙を書いた。

筆を滑らす魔王ジョセフはきちんと執務机に着いている。

広い執務机のその上には、リーリートウからの手紙が開かれたまま、置きっぱなしなっていた。

美しい曲線が特徴的なその文字列は、紛れもなく彼女の筆跡である。

その手紙の最後の方には、追記があった。

PS

勇者探しをしていたらあ、結構好みな爽やか美青年を見つけちゃつたの〜。

栗色の髪に若草色の瞳をしていてえ、声をかけたら真っ赤になつて照れちやつてえ、すゞく可愛いくのよお。

暫くは彼と楽しみたいからあ、何かあっても呼び出さないでね。

貴方の愛しいリリトウより

親愛なる魔王陛下サマへ
生涯変わらぬ忠誠を込めて

遊び女の品定め 演じる役者は三枚目？（後書き）

「遊び女の品定め 演じる役者は何枚目？」

この副題、作者的には満足の逸品です。

A・歌舞伎で、「一枚目」は主役、「二枚目」は美男役、「三枚目」は道化役の事なんだそうで、

此處で、「？」の回答を致したいと思います！

問1 「遊び女の品定め 演じる役者は主人公？」

A・彼女の探している勇者役はこの物語の主人公ではありません。

問2 「遊び女の品定め 演じる役者は美男子？」

A・カツ「いい爽やか青年は役者には選ばれませんでした。
勇者役はどうしようもないオッサンです。格好良くはないと思いません。」

問3 「遊び女の品定め 演じる役者は道化役？」

A・勇者役の彼は、とことん、どうしようもないオッサンです。ギヤグ担当にもならない事でしょう。

打診したら「誰がなるかッ！」と怒られそう。

しかし、茶番に付き合わされている様は、ある意味、道化と言えるかも……。

飛び交う剣舞の打ち合わせ　一合

件のお茶会から約三ヶ月、ロッグジエグバ・ドットは仕上がった
剣を手に魔王城を訪れていた。

前回の帰り際では、巨人族のガギヤ・ダラに捉まり散々だった。
他の三人にも『迎え』が来ていた処を見ると、宰相はさぞかし貸
しを作れたことだろう。

巨人族のガギヤ・ダラ兄弟には、以前から弟子にしてくれと煩く
付き纏わっていたが、あんな奴ら、養える訳がない。

何しろ巨人族なだけに団体も食欲もハンパ無いのだ。

奴らの暑苦しい性格に付き合つのも苦手だ。

結局奴らを振りきつて、家まで帰るのに2週間かかった。

ロッグジエグバは、宰相のように転移などという気の利いた術は
使えない。

己の魔力と魂を、金属に練り上げて鍛えるだけだ。

それでも、各街に設置してある転移紋を用いれば、魔王城から家まで三日程で済む。

それが2週間もかかったのだ。

ウンザリもするだらう。

今回も、何かないとは限らない。

布に包まれた作品を、落とさぬようじつかり抱え、聞こえてくる足音に耳を傾けながら謁見の間に向かった。

一方その頃、謁見の間では、玉座に座つた魔王陛下が、ロッグジエグバの到着を、今か今かと待つていた。

知らせが入つたのは五日前。

勇者の剣の漸ぐの完成に、魔王は浮きたつ心を抑えつつ、そわそわと、入口へと視線を走らす。

「漸く、よ～やく、これで計画を進められるーー！」

鼻息荒く、興奮している魔王ジョセフに、傍りに控えた宰相は素つ気なくも、そうですかと返しただけだ。

それでも魔王は気にしない。

魔界の鍛冶師ロッグジョグバ・ドッドの技術は、他の追随を許さぬ程であり、それにより生み出された魔具は、素晴らしい効果を持つ。

魔区で唯一の鍛冶師であるから、魔区一であるのは言わずもがなだが、魔区外を含めても同一の腕前であると断言できるだろ？

期待に胸を高鳴らせ、傍らの絵本の表紙を見やる。

表紙の絵には、光り輝く剣を掲げ、魔王（……だという黒い怪物）に立ち向かう勇者の姿が描かれていた。

そんな魔王に、物言いたげに、眉をしかめるのは魔界の宰相セズシルバスである。

子供向け絵本を小脇に抱え、暇さえあれば、何度も読む口が主君。

魔王を退治した勇者の逸話が書かれた本を、期待に満ちた眼差しで見詰める魔王陛下。

どちらも厭だ。

しかし、口に出すのも躊躇に障り、そのまま黙つて控える事にする。

それほど待つことも無く、扉脇に控える丘は、鍛冶師ロッグジョ
グバ・ドットのおとないを告げた。

飛び交う剣舞の打ち合わせ 一吟

現れたロツグジエグバに、本を投げ出し、魔王は駆け寄る。

「これか？」

ロツグジエグバの抱える布包みに、早くも田が釘付けである。

「ああ、こいつが、頼まれてた勇者の剣だ」

そう言つて差し出された細長い布包みを、緊張で強張った手で何とか受け取り、はらりとその布を解く。

「どうだ？なかなかの出来だと思つんだが

涼しい顔をした宰相の隣で、魔王ジョセフは絶句した。

その剣は、刀身が緩く湾曲し、鍔元から切つ先にかけて幅広になりながら延びていたが、先を斜めにカットする事で、その鋭さを保つている。

魔王ジョセフが想像していたのは、絵本にあるような真っ直ぐな十字型の剣だった。

基本の形からして、イメージとは全く違うが、これだけだったら、まだ良かった。

問題はその先である。

その刀身は、ギラギラと黄金色に輝き、柄の上部には牛の目玉が埋め込まれていた……。

拳大はあるうかといふその目玉は、白く濁つてはいたが、ヌメヌメとしたその表面が、時折、刀身の黄金を映して煌めく。

そこから伸びる炎を模した彫刻が、鍔の役目を果たしている。

柄は尻尾の裂けた一匹の一頭蛇を捩つて固めたもので、柄の両端はビビッドカラーな赤と青が綺麗な螺旋を描いていた。

ふたつ頭の蛇が共有する腹の部分は、派手派手しい紫で、握りやすくする配慮なのか、ここに捻じれば無く、少々押しつぶしてあつた。

柄尻では、首まで捻じれた赤と青の蛇たちが互いを飲まんと噛み合っている。

固まる魔王を満足げに見やり、ロッグジェグバは解説を始めた。

「注文通り、持つ者の力を上げる光り輝く魔法剣だ！名をエンドヌツデスという。こいつは持てる奴の攻撃力を20倍に底上げし、目玉の粘液には、体力・気力・精力・魔力を増強し、疲労回復や治

癒速度の高速化といった効能がある。戦闘中でも、ちょっと舐めりやあい。3分と経たずに効果が出るだらう」

鬚を剃る時間も惜しかったのか、口鬚だけを伸ばしている普段と違つて、頬や顎も無精鬚に覆われている。

「なにしろ、歴史に残る一芝居だらうからな。ちよこと、腕を張つて材料の採集から手掛けたら一月以上も掛つちました。どうだ? 柄なんか、極上の二頭蛇だらう? イイのがなかなか見つからんくてなあ、そいつに出てわすまで一月も山ん中歩き回つちました」

そう言つと、ロッグジエグバは、照れ臭いのか、痒いのか、ごつごつとした大きめの手で、ガシガシとその鼠色の頭をかいだ。

確かに、極上の二頭蛇だ。

一頭蛇は大抵一色のものが多く、色彩が多い程ランクの高いものになる。

質は、その大きさと鱗の艶、発色の良さで決まるが、この柄の蛇ならどれも特上に当たて嵌まるだらう。

さりに、尻尾の先まで二つに分かれているものは希少性が高い。

普通の一色一頭蛇の相場と比べて、およそ60倍程の値段がつく。

革製品に加工せずとも、売れば、20人規模の一部族が余裕で

一冬暮らせる額だ。

一生をかけて探しても、見つかるかどうかと言つたところの蛇。

とてもじゃないが、探した期間が一ヶ月だけとは信じたくない。

見るものが見て、それを聞けば、血涙を流してロッグジエグバの幸運を呪うことだらう。

思えば、ドッグの造る品の中には、市場には上がらないほどの稀少品素材が使われていることが度々ある。

今までは、腕と勘の良い獵師達にコネでも有るのかと思っていたが、それらも今回のように、自ら探つて来ていたと考えられる。

……俄には信じがたいが。

蛇皮には興味が無いから、これについてはどうでもいいが、このままでは価値ある稀少素材の多くが、ドッグの悪趣味に染まる。

早急に何か対策をたてる必要があるだらう。

標準人間型にして、凡そ100000人規模の収容が可能なだだつ

広い謁見の間にいるのは、たつた5人。

魔王ヴェルデイルガ・ジョセフと宰相ヴィーズ・セズシルバス。

鍛治師ロッグジェグバ・ドッドと、扉脇の衛兵一人。

暫し、誰もしゃべらず、沈黙が降りる。

日に焼けたロッグジェグバのその顔は、はにかんでいるのか口元が少し歪んでいた。

それを見た魔王陛下の口元も、文句言い難さにやはり少々歪んでいる。

予想外の懸案事項は出てきたものの、予想通りのこの事態に、宰相セズシルバスは素つ気なくも無反応だった。

扉脇のベテラン衛兵達は、心頭滅却して空氣となる事に慣れていた。

魔王陛下の周辺で、奇怪な事は度々起じる。

魔王陛下がここ暫く、何処に行くにも絵本を小脇に抱えていようと、

ロッグジエグバの悪趣味振りに、更に磨きが掛かっていようと、
会話から察せられるに、何故だか知らんが、陛下が芝居を打つ氣
でも。

更には、あの宰相閣下がそれを黙認されようとも。

兵士二人は、誰に言い触らす訳でもなく、唯、空気となつて、其
処に佇む。

合言葉は、

「キニシテハイケナイ」

飛び交う剣舞の打ち合わせ　一合（後書き）

大のお気に入り小説が完結してしまいました！
祝うべきか、嘆くべきかという複雑な心境です。
加えて徹夜のお蔭でハイテンション！！

記念と勢いで本日2度目の投稿を果たしました！！

嗚呼、後4個分しか書き終わってない……。
私は、思いついた所から書いて置いておくタイプです。
真ん中書いてませんが、終わりの方2個分は、もう書いてしまいました。

更に、最終話の後書きまで既に書き終わっている始末。
なので、私が途中で息絶えない限り、この小説は完結することでしょう。

……どんなに更新速度落ちよつとも。
ほんとは、一週間単位で更新するつもりで、これが掲載されるのも、畢冉頃のはずだったのに。

ナニーのスピード。

そもそも、のんびり更新になるかと思われます。
皆様お達者でえ～

。。。（Ｔ「Ｔ）／

飛び交う剣舞の打ち合わせ 二回

魔界唯一の鍛冶師であり、世界一の腕前を誇るジードはしかし、センスが悪い。

彼に言わせると、ただシンプルな剣を造るのではつまらず、牛の目玉だとかその辺の怨霊だとかを装飾し、オリジナリティを追求しあくなるのだとか。

セズシルバスも多少は剣を嗜んだが、己のセンスとプライドにかけて、ドツドの剣を使つた事は一度として無かつた。

彼の剣はこれまで幾度も見てきたが、どうして魔王はこの事態を想定できないのか。

理解に苦しむ。

取り敢えず、成り行きを眺めていると、覚悟を決めたか魔王ジョセフが口火を切つた。

「ロッグジェグバ

「お、なんだ？気に入つたか？」

「……悪いが、これはダメだ」

「は？何故だ？」

魔王は徐に駆け出すると、投げ出していた絵本を拾つて戻つてくる。

「コレー！こんな感じのやつが良いんだー！…こんなのが頼むー！」

そう言つて、泣く子も黙る存在であるべき魔王ヴェルデイルガは、子供向け絵本の挿絵を指差した。

絵本の勇者が掲げる剣は、全体的に金色で、湾曲のない、十字型のまっすぐな剣だ。

刀身は、太めの両刃となっていた。

柄の上部には青い宝石が嵌め込まれ、金の彫刻で形作られた翼が一対、宝石に沿つようにして円を描いている。

そこから光が放たれているかのように、同じく金色の線が放射状に伸ばされていた。

「…・そうか、イメージが違つたか。すでに決まったイメージがあるなら早く言え」

「金色」、「太めの刀身」、「柄の上部に嵌められた玉」等と、類似点は多々あるものの、さすがは鍛冶師！

刀剣に対するこだわりには理解があるようで、そう言つたロッグジエグバは残念そうに、軽く眉尻を下げてはいたが、割とあっさりとした態度だった。

分かつてもらえたようではほつとした魔王は、すぐに作つてくると、いつロッグジエグバを見送つた。

一ヶ月後、ロッグジエグバが持つてきたのは、原寸大の鷲の剥製……の背中から、「まつすぐな」刀身が生えたものだった。

一本の足が布によつて巻かれてあり、そこが柄になるようだ。

鷲の翼は左右に大きく開いており、翼の先から翼の先まで、裕に一メートルはあるだろ？

振るう時の空気抵抗が凄そうだとか言つ以前に、かなり邪魔だ。

「どうだ？ これならいいだろ？」

三ヶ月、待ちに待つた勇者の剣は、そのオドロオドロシイ見た目に没になり、更に待つこと一ヶ月にして、目の前に出されたのは鷲の剥製……。

魔力の成長は未だ止まらず、日に日に膨れ上がりしていくばかり。

魔王はキレた。

「いい訳ないだろ!? 鷺の剥製引かずる勇者がどーじこーるー?...
なんでこんなに悪趣味なんだ!—!」

怒鳴つた魔王は、顔を覆つて天を仰いだ。

魔王は呆れた視線を返す。

「ロツグジエグバ……。おまえ、自分よりよっぽど年上の、師ラグアスにもそう言われていただろう……？」

ラグアスは、ドッヂの鍛冶屋としての鍛匠であり、養い親でもある。

師の名前付きで指摘されたその事実に、若干怯んだロッグ・ジェグバは、少々ムツとしながらも、「すぐに代わりを打つてくる」と、言い残して帰つていつた。

「龍の目玉を飾るなり」といふにしやう。」

「それでは強度が落ちるー！」

「刀身が朱色と漆黒のマーブル模様をした聖剣なんてあり得んだろ
うー！」

「だから、いいんだろ？！ありふれた剣など造つてもつまらん！
！」

その後も幾度か、ドッヂの剣の献上とそれに対する魔王の駄目だ
しという応酬は続き、

……一ヶ月後には、魔王ジヨセフは、立派なクレーマーと化してい
た。

魔王を補佐する宰相の私としては、もっと別の面での成長をして
頂きたい。

魔王は喚いた。

「いいから！もう、装飾とか付けなくていいから…シンブルなや
つでいいからーー！」

涙目で。

こうして、見た目無難な聖剣は、この三日後に、ロドリゲスといふ名でこの世に誕生した。

ロッグジェグバ・ドッドとしては、手抜きに手抜きし、その効果の程は、向けられる魔法攻撃の無効化のみ。

なんとも、不満の残るこの作品に、ロッグジェグバは銘を入れはしなかった。

後に、人間界で後生大事に残されるこの剣は、女神に授けられし宝剣としてエレミア国の大殿に奉られ、神官の術でその効果範囲を拡張せる事により、戦時の護りにも一役買つただが……。

魔王討伐を果たし、帰還した勇者に知られた聖剣の名。

「ロドリゲス」

その名を広めることは、エレミア国王宮と大殿上層部により、頑なにまで憚られ、王国の闇の歴史までをも綴る閲覧禁止図書に、ひつそりと書き添えられただけだった。

世には、【勇者の剣】としてのみ伝わって、その一つを駆せて
いる。

飛び交う剣舞の打ち合わせ 二回（後書き）

初ポイントと初お気に入り登録に浮かれてしまったので。

書いたものって人を表しますよね。

私、単純なんです。

因みに、

魔剣に禍々しいイメージがあるのは、このセンスの悪いロッグジェ
グバ・ドッグが魔界唯一の刀鍛冶であつたからに他ならない。

と、いうのがこの世界での設定です。

次は、お伽噺を投稿します。

ちょっと短めですが、私のお気に入りです。

夢見る羊のお伽噺 第一話（前書き）

777

ニーーク スリーーセブン！！

何か縁起いいですよね。

この「夢見る羊のお伽噺」は、私のちょっとしたお気に入りで御座います。

この第一話でオチを察せられた方はいらっしゃるでしょうか？
そんなに捻つた訳でもなく、たりひとつ分かづかしかもしない
ですが、此処にそつと挑戦状を置かせてもらいますね。
フフフ（ー+）

続きを読む
続きの第一話は、一週間後の月曜日7時にお約します。

夢見る羊のお伽噺 第一話

パーン族の族長バ・パムメレは、その夜、王からの呼び出しを受け、王城へとやって来ていた。

何でも、ロッグジエグバが勇者の剣を完成させたのだとか。

あのお茶会があったのは、約半年前のこと。

もうとっくに、あの話は流れたもんだと思つていていたのに、まだ続いていたのかと知らせを受けて軽く驚いた。

正直な話、そんな馬鹿馬鹿しい事に付き合いたくなどなかつたが、それでも、王からの呼び出しに応じたのは、宰相の提示したラタスク族のジェデクの件があるからだ。

ラタスク族は、魔力を持つたリスの一族である。

もふもふで、ふつかふかな毛並みを持つた愛くるしい外見の彼らは、ペットにしたい魔族ナンバー1の人気ぶりで、いつの世も女性たちの心を鷲掴みにしてきたのである。

件のジェデクは赤リストで、その艶やかな赤茶の毛並みを自慢している。

ラタトスク族の中でも、人一倍、自分の毛並みに気を配っている
ようで、その艶やかさから推察されるにかなりの触り心地の良さだ
ういふ。

……が、自慢の毛並みが乱れるからと、彼は一切誰にも触らせよ
うとしなかった。

そのジェテクを、ひと月、好きにしていいといふ。

前々から憧れを抱いていたババムメレには、これを断る理由など
は微塵も無かつた。

お茶会の時と同じ、魔王陛下の応接間。

そこのソファーに座り、資料を適当に流し読みしたババムメレは、
向かいの魔王に問いかけた。

「それで、このがに股男の夢に入つて、」

「が、がに股つて言つなーそ、そーは見ない振りをだなつ

「　はい、はい。そこで、このカニ足男に勇者として魔王さまを
倒すよつて言えばいいんでしょ～？」

「か、カニ足男……」

魔王ジョセフの勇者に対する絶対的な幻想は、ババムメレのその

言葉に難なく汚された。

ショックから立ち直れないでいる魔王に代わって、セズシルバス
が口を開く。

「はい。そして、その際にはこちらのロッグジエグバの剣を、聖剣と偽り渡してください」

「ああ、これが資料にあつたロドリゲス～？うわ～、普通だ～。あの人、こんなのが造れたんだね～」

宰相から渡された剣をまじまじと見やる。

それには、魔区の剣独特の禍々しい装飾は、一切付いていなかつた。

「ええ、それが造られるまで5ヶ月と27日を費やし、計11振りもの剣を、無駄に造る事になりましたが」

ババムメレはセヒでふと、前から考えていた事を口にした。

「ねえ、ジーデクの件なんだけど、これ終わったら明日からすぐこ
でも借りたいの」

「ええ、分かりました。すぐに」用意しましょう」

冷徹で、頭の切れる魔界の宰相セズシルバスは、何も聞かずにつき承した。

「それじゃ、ひとつと済まして来るね～」

その言葉に、今までショックで固まっていた魔王ジョセフが、慌てて復活を果たす。

「い、いいか？女神らしくだぞ！女神らしく…くれぐれも女神らしく頼む…！」

「はい、はい」

「女神らしく」というのが、どんなものかは知らないが、魔王の相手がメンド臭くなつたババムメレは、無責任に適当な返事を返した。

柔らかな布製ソファアームchairを預けて、そつと皿を譲る。

今夜の夢は、三十路を過ぎた【がに股男】に魔王退治をするよう言つて、勇者にするコメ。

如何にも、メンド臭くてつまらないそつだが、ババムメレは微笑んだ。

ジエデクのもふもふフカフカな、その触り心地を夢見ながら。

夢見る羊のお伽噺 第一話（後書き）

あれから三日……

結構な人数の方々が、読んでくれたらしいのに、私の置いた挑戦状は未だ放置。

展開予想、するのもされるのも好きなのにー！

受けたつといへ、男氣ある輩は居らんのかああー！（泣叫）

因みに、あれからストック増えまして、2・5倍に増量しました。

プラス、終了後の番外編まで3話程。

見たい方いらっしゃいますかね？勇者サイド。
此方は、R15にするか検討中。

（どの程度でアウトなのか判断難しいですよね）

5日が経過……焦ってきた。私が！

挑戦状の為に2週間つて言つたのに。

誰も拾つて受けてくれないから、嘘にしてもう投稿しちゃおうか

と迷い中。

7日にも、続きを投稿すれば、嘘にはなりませんよねー...とい、唯我
独尊な彼の思考で考えてみる。

うー、どうしよう。

夢見る羊のお伽噺 第一話

魔区外で信仰されているユセアス教の神話は、一応魔区においても知られている。

世界を創ったのは、ユセルアーナスという名の女神で、遠い昔、一人の人間の若者に、その加護を与えて魔王を倒させたのだとか。普通の人間よりかはよっぽど長寿な魔族だが、眞偽の程は定かではなかつた。

夢幻郷と呼ばれる空間を足早に渡つていぐ。

星月夜の煌めく空の中にいるような、この不思議な空間はババムメレのお気に入りだつたが、今は、ひとつとやる事をやって、一刻も早くジエテクに会いたかつた。

星のように輝く数多の夢や幻の中から、目的の男の夢を見つける。

ババムメレは角を隠すために、衣装とともに用意されていたヴォールを被つてその中へと飛び込んだ。

くだらない計画を推し進める魔王さまの言つ通りにするのは嫌だけど、やり直しに等ならぬ。やんと女神らしく振舞おつ。

そう決意して、姿勢良く、品の良い微笑を湛えたバパムメレが次に居たのは、ほの暗く冷え切つた、石造りの部屋の中だった。

男はこひらに背を向けて、ボリボリと背中を搔きつつ、行儀悪く寝つ転がっている。

剥き出しの石壁はかなり汚く汚れていて、部屋には窓もドアも無い。

後ろを振り返れば、幾本も並んだ太い鉄柱　鉄格子があつた。

投獄された事のない者が見る夢にしては、かなり現実的な再現だ。

餓えた臭いまでしてくる気がする。

バパムメレは、周りを無視して言い放つた。

「ジヤルダス・テルガン、貴方を勇者に選びます。魔界へ旅立ち、魔王を退治なさい」

男が億劫そうに振り返る。

その焦げ茶の瞳がバパムメレを見つけると、下卑た笑いに口を歪

めた。

「ああ？何だ、ネエチヤン、お相手でもしてくれるってかあ？」

バパムメレは、男を無視した。

「私は創世の女神、ユセルアーナス。これは、私の加護を剣の形に具現化させたものです。この聖剣ロドリゲスを持つていれば、悪しき魔物の攻撃魔法は即座に打ち崩される事でしょう」

そういうて、ロドリゲスをふわりと浮かせ、床とは水平の状態で男の元まで移動させた。

普通なら、こんなことが出来るのは宰相のような風使い位だが、此処は男の夢の中。

ちょっと魔力を乗せて想像すれば、簡単なものである。

「へえ～、これで攻撃魔法が利かねえってか。んな都合のいい剣があるかツつうのーまあ、只の剣だつたにしろ、こいつは貰つといてやるぜ」

夢の中だからか、空に浮く剣を驚く事も無く受け取ったその男は、徐に立ち上がるとバパムメレの腕をつかんだ。

「で？ネエチヤンよ。人にモノを頼むときや、如何するもんか、モチロン、わかつてゐるよなあ？」

掴んだ腕に力を込めて、ババムメレを引き寄せる。

男が、いやにやせとした瞳^こを浮かべながら、その顔を近づけた。

男の生温かい息が顔に吹き掛かり、口臭^{くち 臭}が鼻に付く。

男の力は存外強く、とてもじやないが、ババムメレでは振りほどけない。

端から見たら逃げ場もなく、絶体絶命^{ぜつたいぜつめい}といつこの状況下で、彼女は「こんなことを考えていた。

魔王を退治するよつて伝えたし、ロドリゲスも聖剣だと言つて女神らしく渡したから、もう、終わりで良いよね。

そう結論付けると、ババムメレは田の前の男の腕を逆に掴み返し、股間に膝蹴りを喰らわせた。

「オジサン、息臭い」

男の急所に強烈な一撃を喰らい、もんざり打つて男は倒れる。

彼は声にならない叫びを上げて、床の上に縮こまつた。

「それじゃ、私急いでるからもつ帰るけど、ちゃんと魔王、退治

に行つてよね~」

そう言つと、自称女神は跡形もなく消え去つて、後には、痛みに震える男と聖剣ロドリゲスが、床に転がり残されていた。

数時間後、とある国のとある街に、一人の囚人と看守が居た。

看守は軽いサディストで、囚人は恐喝をして捕まっていたなんともガラの悪い男だが、あと三日もすれば釈放されるはずだった。

ある日の朝、看守が見回りを兼ねて朝飯を持って行くと、牢屋の中には、なんと、蹲る男とともに、長剣が転がっているではないか!

看守は慌てて仲間を呼ぶと、何故か既に顔色が悪い囚人を叩き起し、さっそく尋問を始めた。

「牢獄の中、どうやってこの長剣を入手した?」

囚人は始め、知らぬ存ぜぬの一矢張りを突き通し、何も吐こいつとしなかつた。

しかし、看守は囚人に剣を見せた時の動揺を見逃すことにしていない。

看守は追及の手を緩めることなく、尋問を続けた。

やがて、囚人は訳の分からぬ陳述を始める。

曰く、自分は女神ユセルアーナスに選ばれた勇者であり、その長剣は女神が授けた聖剣ロドリゲスであるのだと。

ふざけるなー！誰がそんな話を信じるか！

俄然、看守は尋問に燃え、男の拘留期間は伸びたのだった。

夢見る羊のお伽噺 第一話（後書き）

単純なことに気がつきました。

予約はしたので嘘にはならないといふことを。

そして、今田、連載初めて一ヶ月なのですよ。
これはもう、投稿しちゃおうとこうじで。

取調室で尋問を受けていた彼、本文では割とあっさり書いたのですが、その特徴をもうちょい詳しく描くするとですね。

風呂にも入らず牢獄生活だったもので、髪はフケだらけでボサボサ。顔は無精髭に覆われて、歯は黄ばんでいたのです。

そんな囚人の供述が、アレだったわけですよ。

おひょくつていいるのか、狂い始めたようにしか思えませんよね。

彼、ちゃんと本当のことを話してたの……。

夢見る羊のお伽噺 第二話

「　おい！セズシルバス！冗談やめろ、こいつから出せ！」

ババムメレが夢から覚めると、目を開く前に、そんな喚き声が聞こえた。

それに、宰相セズシルバスの声が答える。

「以前から、『王女に振り回されるのはもう沢山だ』『少しの間で良いから、付き人をやめたい』と、仰っていましたよね？」

そつと口を開けば、夢幻郷に渡る前の魔王陛下の応接間。

目の前には、焦がれてやまない、夢にまで見た赤茶の毛並み赤リス、ジェテクがそこに居た。

彼は、格子のケースの中に収められ、テーブルの上に置かれている。

「だからって、なんだよコレ…？ペットか？ペット扱いか…？俺は撫でくり回されるなんて御免だ！」

彼は一いち方に背を向けて、宰相セズシルバスに猛抗議を仕掛けている。

セズシルバスはその抗議に、顔色一つ変えることなく、話を続けた。

「貴方は魔王陛下の臣下でしきつ。此度、陛下の意向を叶える為にパーン族の族長ババムメレに協力を仰ぎました。その報酬として、彼女には、ひと月、貴方を好きにしていいと確約してあります。ちよつとした特殊任務だとでも思つてください」

何を言つても覆りそつのない現状に、赤リスのジェデクは諦めの心境で頃垂れた。

「代わりと言つては何ですが、一年の有給休暇と特別手当を出します」「うう」

その言葉に、ちょっとは慰められたのか、赤リス、ジェデクは顔を上げてこぢらを振り向く。

黒い、つぶらな瞳と目が合つた。

「おい、言つとくけど、俺は撫でられるのが嫌いなんだ！あんまりしつこく撫で回したりしたら、その指噛み千切つてやるからな！！」

先ほどから目を輝かせて、ジョデクを見ていたババムメレは、興奮のままに、うん、うん、と大きく一回、首を頷かせた。

宰相セズシルバスの転移魔法で、集落へと送つてもらつたババムメレは、家に帰るとケースの中から赤リス、ジェデクを解放した。

ババムメレが夢から覚めたとは言つても、時間はまだまだ夜遅い深夜である。

同じ昼行性でも、先ほどまで眠っていたババムメレとは違つて、ジエデクはかなり眠かった。

そんなジエデクに気が付くと、ババムメレはテーブルの上 テーブルから出たジエデクのすぐ傍に、敷物を敷いてくれた。

ババムメレをちょっと見直して、赤リス、ジエデクはその上に横たわる。

ババムメレは何やらじりじりと探していた。

きつと掛け布団だらつ。

今は春。自分には暖かな冬毛があるから別に構いはしないのだが、彼女なりの気遣いだろう。

撫で回されるのは嫌いだが、ちょっと位なら我慢してやつても良いかもしない。

1年もの有給休暇は初めてだった。

そんなに長い期間、休めるものとも思つた事もなかつた。

休暇中は何をしようか？

久しぶりに故郷の友人を訪ねてみよう。

旅行などにも行つてみたい。

そんなことを思いつつ、赤リス、ジエテクは心地よい睡魔に身を委ねた。

しかし、

彼はその目に見てしまつ。

ウトウトと、重たい瞼が閉じる寸前、

星でもなく、月でもない、

不吉な冷たい煌めきを……。

眠ったジエデクを前にして、彼女はうつとりそれを眺めた。

艶やかな赤茶の毛並みは、彼の寝息に合わせてゆっくり上下に揺れている。

彼女はそれに、そつと手を伸ばした。

艶やかでいて、もふもふ、フカフカ、触れば夢見心地なその毛並み。

彼女 バパムメレは、思う存分、その毛を刈った。

剃刀で。

一ヶ月と一週間の後。

彼女のベージュの癖毛には、艶やかな赤茶のファーで出来たボンボンが、髪飾りとして揺れていた。

艶やかでいて、もふもふ、フカフカ、触れば夢見心地なその毛並み。

バパムメレの大のお気に入りとなつたそのボンボン飾りは、時は彼女の髪紐となり、また時にはチョーカーとなり、ネクタイとな

り、彼女を彩つていたといふ。

その艶やかさから、赤茶の毛玉はかなりの触り心地の良さだらう。

彼女お気に入りのボンボン飾りは、それを見かけた女性の心を齧りにした。

……が、自慢の毛質が落けるからと、彼女は一切誰にも触らせようとしなかった。

結果、ジエデクの毛は、彼の体を離れた後も、撫で繰り回される事はなかつたのである。

……ところが、既に彼ことつてはどうでもいい事実であった。

冬毛のみならず、ひと皿後にやつと生えてきた夏毛までをも刈り取られ、丸裸のまま解放された赤リス（…だった）ジエデク。

彼はその後、宰相に「えられたまる一年もの有給休暇を、決して誰とも会わず、遊びもせずに、自らの家に引きこもつて泣き過げ」したという。

「ババムメレ」と「剃刀」

。

それは、彼にとって、悪夢のような現実を想起させる、恐ろしい
単語となって眠れぬ夜を過ごさせた。

オムニバス形式と「こう」と「ひとつとした印象の纖細な恋物語が思ひ浮かびます。

……けいじの『二代田勇者の災難』も、実を「こう」とオムニバス形式なんですよね。微妙な所だけビ。

全然しつとりしていない。

「どちらかってこと、どうしよう。ねばつとへ。

「ネバつと」は、なんか違うなあ。

「ほんとう」と感じ。

畠わんがどんな印象を持たれているかは謎ですが、マイペースにのんびりとやって行きたいと思います。

気が向いた時にでもお付き合こ下されば光榮です。

お次は、食いしん坊将軍のターンになります。

勇者、本領發揮！！

満腹竜の息吹は何処？ グルメを廻る旅の一食（前書き）

ユニーク4行！！

今日の深夜から今朝に読まれた方が千人目。

今回は、大人気な異世界トリップものですよ～。

キーワードに入れてみようかな？

満腹竜の息吹は何処？ ゲルメを廻る旅の一食

魔区外の料理はどれもウマい！

魔区のものと比べると、肉も魚も柔らかく、
些か噛みこたえのない事に戸惑つたが、これはこれで旨かった。

歯のせりつけた肉汁が口の中に広がるのだ。

食材からして、魔区のものとは少し違ひますが、四百年生きている初めて耳にする料理もある。

こちらもこちらで地域性があるらしく、酒場や宿屋で噂を聞けば、例え魔区から遠ざかうと、勇者を連れまわして食いに向かつた。

「なあ、俺あ、魔界に行かなきやならないんだが……」

勇者の男は、ババムメレの【女神のお告げ】を、一応は信じたようで、魔区への道から外れると、決まり悪げにそう言ってくる。

宿屋一階の食堂で、骨付き肉をバリバリ食いつつ向かいの勇者を見返した。

出会った当初は、骨まで食いつと、ギョッとしていた勇者だが、この半年で慣れたらしい。

約半年前、魔区へと勇者を案内すべく、オレが魔区外まで迎えに行くと、勇者は拘留されていた。

知の国エレジエンクスの東の町セゼガ。

その街の警備隊詰所に隣接された拘置所1階の牢獄に、勇者は居た。

どうやら勇者は恐喝をして、町の警備隊に捕まっていたようだつた。

これでも、オレは竜人だ。

生まれながらに宝玉を持つ竜の性質を受け継いで、オレも宝玉を持つていた。

竜の宝玉には力が宿っていて、それぞれで違うが何らかの効果を持っている。

オレの宝玉は見たいものを映す事が出来、これを使って勇者の現状を把握したのである。

まあ、罪を犯したんなら償わないといけねえよな？

本音を言えれば、罪だか償いなんかはオレことひやぢうでもいいが、そう結論付ける事で、俺は暫しの遊興、……否、魔区外探索期間を得る事にした。

暫く、町のやいりの食にモンを片っ端から食い倒し、魔区外料理に舌鼓を打つ。

そして十日を過ぎた頃、町の料理を粗方食いつくしたオレは、次の町に向かわんど、拘置所の壁をぶち壊し、なかなか出て来ない勇者を脱獄させたのである。

勇者は名前を……なんつったかな。まあ、勇者で良いだろ？。

田の前に座る勇者は、だいぶ前に食事を終え、今は麦酒片手につまみを食つてこる。

因みに、オレの奢りだ……魔王の金だがな。

よく解らんが、使命感を發揮したのか勇者が決まり悪げに、そつと言えば、

「おまえ、相手は魔王だぞ？今のまんまで勝てると思つてんのかよ？」

と、勇者にはそんな風に言ひてやり過げじて來たのだが……。

「今、何処にいらっしゃるんです?」

宰相にバレた。

その日の遅く、2階の宿泊部屋に戻つて直後のことだった。

窓の隙間から吹き込む風に、宰相の声が聞こえて來たのだ。

そういうや、勇者を連れまわしてもう半年。

勇者が居たのは、大陸東側の魔区から最も遠い西側の知の国ではあつたが、隊を率いるわけでもない気軽で身軽な一人旅。

最短ルートで馬でも使えば、そろそろ魔区に着く頃だ。

……寄り道しなけりやの話だが。

オレは、あの町からの魔区への道筋で、最短東ルートではなく、大回りの南ルートをとつていた。

もちろん、多くの料理、ひいては多くの国に行き合つためだ。

無論、寄り道だつてしまくつていた。

寄り道がバレたとは思ったが、あまり怒らせない為、少々滞在位置を誤魔化して答える。

「あ、あ～、商の国辺りだ」

「うーん、辺り」というのが重要だ。オレは嘘を言つてはいけない。

相部屋の勇者は既に寝ておつ、普通の声で話した。

「農の国ファシトムロンンダの南地区アビンカトリカドショウ
バレていた。

「うーん、知つてるなら聞くなよ」

「とにかく、貴方は、案内をしてくださいね。寄り道などせず」

「こいつの声は、聞いてるだけで心臓に悪い。

「わ、わかった。そつち行きやあいいんだろー？」

「ええ、寄り道はしないでくださいね」

ついに、釘をさす宰相に、了解を告げる事で会話は終わった。

どうやら宰相には、滞在している位置はバレバレだつたらしい。

次の日から早々に、魔区へと向かう事にした。

宰相は、オレでもやつぱり恐い。

アレは、……怒らせるべきではないだらう。

しかし、此処は農の国ファットムロンド。

別名【食の国】とも言われている。

オレは、美味しいもんを食つのが好きだ。

そんなオレは、経費はすべて魔王の金で済ませられるこの旅中に、出来るだけ多くの魔区外料理を食つちまおうと、情報収集を怠つてはいなかつた。

此処、ファットムロンドでは、毎年、秋に食の祭りが開かれており、2年に一度、王都では世界中の料理自慢な名コック達が集い、その腕を競い合う【世界料理大会ファットコンテスト】が開催されるのだ。

その開催は一週間後。

『一週間』

この街からなら、北に向かえば王都に行けるが、東に進めば次の国へと入れる期間。

オレは悩んだ。

満腹竜の息吹は何処？ グルメを廻る旅の一食（後書き）

魔界のデルクさんの人間界旅行。

まあ、異世界トリップ（和訳：旅行）ですよね。ちゃんと。

期待を大きく裏切ること請け合いですが。

次回は2月5日の0時頃に投稿します。

満腹竜の息吹は何処？ グルメを廻る旅の一食

「この半年、何も食つてばかりいた訳じゃない。

オレは勇者の案内役というだけでなく、勇者の鍛え役まで押し付けられていたからだ。

オレは魔区の将軍だ。

もちろん部下も持つている。

オレはしばしば副官を呼びつけでは、突然現れた魔物として、勇者に稽古をつけさせていた。

まあ、たつたの半年で、魔区でもないのに頻繁に魔物に遭遇したら不自然だから、たつたの2回程度だが。

副官には魔法攻撃を中心に、適当に勇者を鍛える様に言つていた。

最後には、やられた振りをするよつとも。

勇者はロッグジョグバの剣の効果に驚喜して、己の強さに自信を持つたようだった。

人の上に立つ上司としては、部下を信じて仕事の一切を任せることも、重要な仕事の内だと言えよ。

故にオレは、屋台の串焼きや揚げパンなんかを食いつつも、ちゃんと仕事をやっていた。

『とにかく、貴方は、案内をしてくださいね。寄り道などせずに

宰相からの駄目押しを受け、一晩悩んだオレはある妙案を思い付く。

多少の回り道をして、農の国の王都へ向かい、世界料理大会のみならず一週間開催される食の祭りを思う存分堪能しても、宰相への言い訳が立つ、とびつきりの案である。

オレは早速部下を呼び出し、勇者に稽古をつけさせた。

もし仮に、勇者が移動不可能な程の重傷を負い、瀕死に陥つたら、それは早急な治療が必要とされる事だらう。

オレは、誠に残念ながら、治療魔法の類を一切使えない。

なので、仮に、勇者が重傷を負えば、医者に診せる必要がある。

まあ、怪我したやつを医者に診せてやるのは、人として当然のことだ。

（判断付かない微妙な奴もいるが、魔族だつて一応は人である。
俺は竜人だ）

そして、それ程の重傷ならば、こんな小さな町の診療所より、国境近くの村医者よりも、王都のようなデカイ街の医者の方が、たぶん、イイ感じに治すのではないだろうか？

オレは、「突如として現れた魔物」に、ボロボロにされて重傷を負つた勇者を引き摺り、王都の医者へと診せるべく、意気揚々と旅立つたのであった。

応急手当てを受けることなく、一週間、道中引き摺られて過ごしたズタボロの勇者は、王都の医者に引き渡した頃には、結構ひどい状態だった。

傷は化膿し、脚は腐れて、正に虫の息といった状態だ。

人間は、魔族に比べて寿命が尽きるのが早いというのは知つてはいたが、症状が悪化するのも早かつたようだ。

そんな状態の人間を文字通り引き摺って来た魔界の将軍デルクバレシスを、只のしがない町医者は、人非人を見る様な目つきで見た。

少々、極まりが悪い心地を感じた魔界の将軍デルクバレシスは、「オレが見つけた時はその状態だつたんだ」と、言い訳にもならない言い訳をして、逃げるよう祭りの雑踏へと消える。

善良な精神から医者を目指したその町医者は、田の前で苦しんでいる一人の患者を救うべく、治療を開始し手を尽くした。

(可哀想だが、脚は切り落とすしかないだろう)

苦渋の決断に、その顔を歪ませながら……。

ズタボロの勇者を取り敢えず、王都の医者へと託したオレは、当初の目的である【世界料理大会ファットコンテスト】の会場へとやつて来ていた。

農の国ファットムロンダの秋祭り【食の祭典】は、世界中から注目される世界三大祭りの一つに数えられ、中でも2年に一度の頻度

で開催される【世界料理大会ファットコンテスト】は田玉イベントとなっている。

世界中から集まつた、腕に自信のある料理人たちが、三日をかけてその料理の腕を競うのだ。

多くの人が見物する為か、野外広場に設定された会場は、一画が特設ステージとなつており、その上で調理や審査が進められていた。

此処に来るまでの大通りも、至る所に屋台が建てられ、あちらこちらの調理台から旨そうな匂いを漂わせていたが、ステージ上の調理台から漂う匂いはそれを軽く上回る勢いで美味そうだ。

今は昼時。ちょうど昼飯の時間である。

ざわつく会場の中、その料理を食べられる時を、まだかまだかと待っていたオレだったが、一向にその時が訪れる事は無く、気付けばその日のコンテストは、もう終了となつていた。

コンテストの品は一般人も審査出来るんじゃ無かったのか！？

オレは隣の奴に、疑問をぶつけた。

「あ～、残念だつたな～。一般人が審査出来んのは初日だけ！今日は一日目だからな」

.....。

「残念だつたな」と言いつつも、顔がニマニマ笑つている！

オレは無性に腹が立ち、ソイツを噛み砕いてやりたくなつたが、我慢した。

その帰り道、何を食つてもどうにもできない苛立ちを抱えたオレは、ふと田にした調理台の上に骨が転がっているのを発見し、それをガリボリ喰らつてやつた。

周りに人がいるのは確認済みである。

素知らぬ振りして帰ろつと、歩き出してしばりくの事。

「ギヤアアアアアアー！！！超珍味！！な幻の魅惑食材、【金の鳥】
がああああああああー！！！」

突然響いたその絶叫に、聞き捨てならない単語があつた。

オレは、その絶叫の元へと瞬時に向かつた。

満腹竜の息吹は何処？ グルメを廻る旅の二食

向かつた先では一人の男が地に手を突いて、力無く頃垂れていた。

青ざめた顔には絶望が浮かんでいる。

そんな事にはお構いなしに、オレは訊ねた。

「なあ、『超珍味！』な幻の魅惑食材【金の鳥】ってなんだ？」

男は放心状態で、オレの問い合わせなど聞いちやいない。

虚ろな目をして一ミリたりとも動かなかつた。

代わりに、男の絶叫に集まっていた野次馬の一人がそれに答える。

「アンタ、【金の鳥】を知らないのかい！？金の鳥つていやあ、幻の超高級食材だ。全ての食通の憧れさあね。」

会話を聞いてた野次馬その2が、興奮しながらそれに続いた。

「おう、調理しなけりや只の鳥だが、優れた料理人がその腕を振るやあ、如何様にも化けるつちゅう魅惑の珍味【金の鳥】！どんな味覚音痴でも、どんな肥え舌野郎でも、そいつを使った料理を食やあ天にも昇る心地だとか！一生の内で一度でもそいつを食えりやあ僕

偉よ。あんた、金の鳥がいつたいビーフしたって言つんだい？」

そいつは、最後に叫んだ男にそう訊いた。

そんなに美味しいもんだと言つなら、是非ともオレも食つてみた
い！

未だ死んだ田をした男が口を開くと、野次馬同様、そいつの話に
オレも耳を傾けた。

「お、おれは、あのエレミア国の宫廷料理人ベベスさんの弟子で……。商の国のオークションで、金の鳥がたった1羽だけ出品されて……、なんとか、骨だけ競り落としたから、ベベスさんがそいつをスープにする筈だつたんだ。あ、明日のファットコンテストが終了したら、会場の客全員に配るつもりで……」

オレは、「骨」という単語に少々嫌な予感がした。

「ベベスさんって、あの有名なベベスさんかい？前回のファットコンテスト優勝者じゃないか！」

「『箭だつた』つい……。まさか、アンタその【金の鳥】をビーフとかしちまつたのかい？」

すると、野は更に責めをカタカタ震えながら呟いた。

「ヤレの調理台の上に置いてたのに、ちょっと田を離した隙に無くなつて……、うう、おれ、ベベスれんこあわす顔がねえ……」

見ると、先ほど苛立ち紛れに骨をちゅるまかした調理台……。

なんでこいつたーあの骨、只の骨かと思つたら、そんな幻の珍味だつたとはー調理されりやあ、絶品料理になるなんて……。ちゃんと仕舞つとけよ！ オレ、只の骨のまんまで食つちまつたじやねえか！ 明日になればオレも絶品料理で食えたのにーー！

オレは、何としても、調理されたら絶品だと叫ぶその幻の【金の鳥】の、『料理』を食いたくなつた。

「よし、オレがその鳥を捕まえてきてやる」

オレは決意も顕わにそつ言つた。

「は？ アンタ話は聞いてたかい？ 幻の食材だつて言つたら？ 市場に出回るのなんて、五十年に一度あるかないかなんだー！」

「王侯貴族の連中にあたつて回りや、持つてるやつも居るかもしけんけどよ」

「捕まえるつて、そりゃ、無理つてもんだろ?」

「あんた、金の鳥の事だつて、今知つたばかりじやないか!」

野次馬その1～その4が口々にそう言つてくるが、オレにとつて重要なのは、金の鳥が捕まえられるかどうかじやない。

何としても、金の鳥料理を食つことだ!!

そう言つてやつたら、やつらは尊敬の目でオレを見てきた。

「あんた、漢だ！」

「兄貴つて呼ばせてくれ!!」

そんな声を背に受けて、オレは金の鳥を捕まえるべく、猛然と何処かに向かつて駆け出した。

因みに、度々都合の良いものしか見えていない魔界の將軍デルクバレスは気付かなかつたが、彼の勢いに呑まれて尊敬の念を抱いたのはたつた数人で、その場の大多数の人々は、訳の分からん彼の理屈に呆れた視線を寄越していた。

その数分後、その場にはエレミア国の宮廷料理人であり、ファットコンテストの前回優勝者である噂のベベスさんが現れる。

彼は、幻の珍味を失くした弟子に、軽い調子で言葉をかけた。

「気にするな。骨ぐらい失くなつたって、俺の腕にかかりやあ何のスープも絶品だからな！」

その場の者は皆、彼の度量の広さに感嘆し、デルクの事など忘れるのだった。

農の国ファットムロンダの北にあるタセローグ山。

鳥だつて動物だ。動物つて言つたら、やつぱ街よか山とかに居るもんだろ。

そんな理屈で、オレは近場の山に来ていた。

早速、『超珍味！－な幻の魅惑食材【金の鳥】』を探し始める。

草木を搔き分け、空を見渡し、一応土も掘つてみた。

途中見つけた蜂の巣を頬張りつつも、蟻の子一匹たりとも逃さぬ集中力で辺りの気配を探り、竜人としての野生の勘を働かせる。

……が、やっぱり全然見つからない。

宝玉を使ってみるか。

オレの宝玉は見たいものを映すことが出来る。

探し物にはもってこいだ。

オレは胸元に手を突っ込むと、宝玉を取り出した。

宝玉で映し出すとは言つても、宝玉そのものに映つて見える訳じやない。

宝玉を握った俺の脳裏に、見たいものは映るのだ。

【金の鳥】の在りかを見る為に、オレは両の瞼を閉じた。

対象の【金の鳥】について、その特徴を、出来得る限り、思い浮かべる。

ヒュウド、【金の鳥】ってどんなだ？

【金の鳥】を、探し始めて数時間。

日も暮れかけて、辺りが暗くなり始めた頃、オレはちよつとした問題に行き当たった。

満腹竜の息吹は何処？ グルメを廻る旅の二食（後書き）

彼、いったい何食、喰つ氣なんでしょうかね？

後で胸焼け起こすの私なのに。

進行具合ですが、ひとつ一つ最終話に手をつけてしました！

けれどもやっぱり、まだ中間書いてない。

携帯で見た時のレイアウト。[レジ]ぱらぐ／ほわほわとした、茶色トーンになつておりました。

あれ、実はババムメレのイメージカラーで御座います。
(アンバー、バーントアンバー、オフホワイトで構成されていたのです)

読み難かつた様なので、初期設定に戻しましたよ。

満腹竜の息吹は何処？ グルメを廻る旅の四食

『探し物にはつづつけ』なオレの宝玉であるが、日下の重要な項目である「【金の鳥】探し」において、その能力は全くの役立たずである事が発覚した。

オレの宝玉は、オレが見た事の無いものを探すときは、その使用に条件が付く。

対象の外見的特徴を3つ、オレが思い浮かべられなければならぬいのだ。

オレが金の鳥について知っている外見的特徴は2つ。

「鳥」である事と、たぶん「金色」であることだ。

オレは、宝玉で見つける事を諦めた。

どっちかといふと夜行性で、暗闇でも余裕で周りが見えるオレは、それでも諦めず、「山の中を一晩探し続ける。

草木を焼き払い、空を睨んで、一応土にも潜つてみた。

途中見つけた一頭蛇を頬張りつつも、蟻の子一匹たりとも逃さぬ集中力で辺りの気配を探り、竜人としての野生の勘を働かせる。

……が、金色の鳥など全くと言つていい程見つからなかつた。

オレを嘲るかのよう、金色の朝日が眩しく輝く。

むかついたオレは、天に向かつて炎の息吹を噴き上げた。

そして、オレが諦めかけた頃、視界の端に見た事のある鼠色がチラついた……朝日では無い金色も！

ガバッとそちらに顔を向ける。

前に居るのは見た事のある鼠色頭。

そいつが、持っていたのはツ

「 つーおつまえ！ ナー持つてんだよー！」

田の前を歩くロッグジェグバが持っていたのは、正に、探し求めていた金の鳥！！

オレは叫ぶとロッグジェグバの元へと駆けた。

「ああ、これが？」こいつはつっさつきイキナリ空から降つて来たんだ。丁度、武具の素材集めをしていた所でな。どうだ？この金ピ力具合なんか結構良さそうだろう？」

そう言つて、ロッグジェグバは金の鳥を掴んだ右手を持ち上げた。

掴まれた鳥の足は、少々焦げて欠けている。

クソッ！勿体ない！欠けてなけりやあ、もつと食い分増えただろ？に！？

暫く、『超珍味！！な幻の魅惑食材【金の鳥】』を凝視していたオレだつたが、その言葉の意味するところに気が付くと、肝を冷やして絶句した。

信じられないっ！！

『超珍味！！な幻の魅惑食材【金の鳥】』を、武具の材料にするだと！？

オレはなんとか気を取り戻すと、ロッグジェグバ相手に交渉を試みた。

「ロッグジェグバ、悪いがそれは、オレにくれ」

「ん？ 何故だ？ オレはこいつで鎧を造つてみたいんだが」

やばいな、ロッグジェグバの奴、金の鳥が何かも知らないで武器にする気満々だ。

金の鳥が五十年に一度、市場に出るか出ないかといつ幻の高級食材だと教えれば、ロッグジェグバも鎧なんかにはしなくなるかもしないが、それだと確実に取り分が減る！！

オレは焦った。

なんとか、ロッグジェグバに金の鳥の価値を知らせず、コイツの魔の手から魅惑食材を救出してやらなければならない。

未だ存命中でロッグジェグバに足を掴まれ、逃げる事の出来ない鳥は、憐憫を誘えそうな音で一声、ケルーと鳴いた。

「……ロッグジェグバ。実は、勇者の事なんだが……」

オレは、顔を見られれば見破られるかもしれないという懸念と、少々の疾しさから、ロッグジェグバから顔を逸らして続けて言った。

「あいつ、オレがちょっと目を離した隙に大怪我を負っちゃって……、それで、なんか滋養の付くもんを食わせてやりたいんだ」

前半部分は、別に嘘ではない……が、勇者に珍味を食わせるつもりは微塵も無かつた。

「……そうか、わかった。」こつは持つていけ

ロッグジョグバは神妙な面持ちで一つ頷くと、あつさり珍味を渡してくれた。

「勇者の男はそんなに酷い怪我なのか？何なら、こつも持つて行くと良い」

そう言って、ロッグジョグバはきつちつと封のわれている小瓶をひとつ投げて寄越した。

「なんだ？薬か？」

「ああ。ヒンドヌックデスの田玉粘液と、ケルグヒスジャラの脾臓なんかを混ぜたやつだ。とりあえず、怪我に良い」

「ふーん。そつか、まあ、もらつとくわ。ありがとな」

オレは小瓶を懷にしまつと、金色の鳥を左手に意気揚々と出した。

満腹竜の息吹は何処？ グルメを廻る旅の四食（後書き）

これで、『デルク編終わり』な訳ではありません。
ここで終わつたら不自然ですものね。
食いしん坊将軍まだ食つ氣です！

朝・昼・晩とおやつで四食。

五食といふと、
あれか？夜食か！？

太るぞデルク！

でも憎いことにこの『デルク、太らないんですね』。
ドラゴンって多分、胃もデかいんだろうなあ。 そして、消費も
半端ないんでしきう。きっと。

満腹竜の息吹は何処？ グルメを廻る旅の五食（前書き）

成績通知が届き、無事に卒業出来る事が判明いたしました！

嬉しさ余つて、投稿します。

満腹竜の息吹は何処？ グルメを廻る旅の五食

「コジ、コレは……」

昨日の男を宝玉で見つけ、捕まえてきた【金の鳥】を見せると、その隣の男が目を見開いて大声を上げた。

「えッ、伝説の【黄金の鳥】……？」

なんと、オレが捕つて来た金色の鳥は、100年に一度、人々の目に触れるか触れないかという伝説級の代物だつたらしい。

オレが捕つて来た金色の鳥は、その全身が黄金で出来ているかのように輝きまくつており、【金の鳥】の内でも別格にあたる最上級のモノであつたらしいのだ。

普通の【金の鳥】といふのは、金に見えない事も無いといつ程度の茶色の鳥で、一部にでも金色が混じれば上物なのだそうだ。

どうか、魔王の髪色つて『上物な金の鳥色』だったのか。……
喰つたらそこそこ、美味しいだろうか？

昨日の男の隣の男は、あの時、話に上った前回優勝者であった。

オレが当然として「やる」と言つたら、恐縮されて拒否された。

「いひつら馬鹿か？ オレじや調理出来ねえだろ？」

その顔を伝えて、オレは断固として【黄金の鳥】をそこそく等に押し付ける。

コンテスト終了後、絶品料理の無料配布は予定通りに行われ、配布前に【黄金の鳥】提供者として紹介されたオレは、街中の人に神の如く崇められてられた。

そして捧げられた数々の料理はどれも美味く、オレは最高の一日を送るのだった。

……【黄金の鳥】の肉入りスープ。アレは、言葉には出来ねえ……。

まだ、明日もある。

そう思つたオレは、深夜を回る前に宴を切り上げ、宿へと帰つた。

帰り道に、懐の薬の事を思い出したオレは、ちよつゝら医者宅に忍び込んで、寝ている勇者に飲ませてやつた。

医者も勇者も、もちろん、起こしてなどいない。

何しろオレは、将軍だからな。

住人を起こさず他人の家に侵入するなどお手のものである。

まあ、一応夜遅くだからな。オレなりの気遣いだ。

その夜、【農の国】の王都、某町医者の診療所兼自宅から、男二人分の絶叫が響き渡つた。

何事かと起き出してきた近隣の住人達は、診療所のベットの傍で絶叫しながら尻餅つきつつ後退している町医者と、ベットの上で絶叫しながら、筋肉だとか血管やらを、左の腿の辺りから、うねうね伸ばす魔物を見た。

【黄金の鳥】の宴で盛り上がり、同一の信仰対象を得た事により、凄まじい程に結束力を高めた住人らは、言うまでも無く、王都総出で魔物を撃退したのであった。

満腹竜の息吹は何処？ グルメを廻る旅の六食（前書き）

六食目。

1日で六食つていいと何あつますかね？

朝食、昼食、夕食、夜食、おやつ

……で、五食とあると、あとひとつ。

「おみぞ」でしょうか？

知つてます？おめざ。

私は、テレビ番組で知りました。

江戸時代辺り、裕福な家庭の子の寝起きが悪かつたりすると、口に菓子を放り込んで起こしたそつです。

頭に糖分という栄養がまわって、ちゃんと起きられるのですよー。
低血圧の方は是非お試しください。

しかし、そんなに食つと、太ること確実なので、金平糖位が丁度
良いんじゃないでしょうか？

私は、気にせずマドレーヌとか食つちゃいますけど（笑）
私の体型は「想像にお任せします。」

満腹竜の息吹は何処？ グルメを廻る旅の六食

その日の遅く、2階の宿泊部屋に戻つて直後のことだった。

「今、何処にいらっしゃるんです？」

窓の隙間から吹き込む風に、宰相の声が聞こえて來た。

多少ビビったが、今回はちゃんと大義名分を用意している。

オレは堂々と答えてやつた。

「ああ、農の国の王都だ。勇者の奴が大怪我負つちまつたからな。ちゃんとした医者に診せんのに仕方なく、ちょっとこっちまで来る事にしたんだ」

オレの大義名分に、宰相は即座に言葉を切り返した。

「通常、重傷者は一刻も早く、近場の医者に診せるべきでは？現在、農の国ファットムロンドでは、【食の祭典】が開かれる時期ですが、それに行きたいが為に、貴方が勇者に怪我を負わせて王都まで引き摺つて行つたのは、分かつてゐんですよ？」

バレていた。

どうやら宰相には、滞在している位置だけでなく、その細かな行動や、オレの意図までバレバレだつたらしい。

魔界の将軍デルクバレスは、何でも見通す魔界の宰相セズシリバスに、これまで以上の恐ろしさを感じた。

しかし、何の事は無い。

彼の信頼する副官が、いつも仕事を押し付けられる腹いせに密告をしたのである。

そんなことを知る由も無かつた魔界の将軍デルクバレスは、次の日から早々に、勇者を伴い魔区へと向かつたのだった。

医者宅では無く、何故か王都の外れで見つけた勇者は、なんぼかマシだがまだまだ怪我だらけである。

ロツグジエグバの怪しげな薬は、あまり役には立たないようだ。

まっすぐ向かえば、5か月ほどで魔区に接するガレスト国に着いた。

今は、ガレスト最東端の街バジクジェンクスで宿をとっている。

「ランプの灯る室内で、一応それらしへ荷物の確認をした。

明朝に出て馬を使い、明後日には魔区へと入る」ことが出来るだろ
う。

その血を勇者に呑むと、ランプの加減が勇者の瞳が揺らめいた。

「……なあ、やっぱり、魔界に行くのはまた今度にしないか？」

「は？」

思わず言葉に聞き返す。

「や、だつて、魔王ひつたら、やっぱ強えーだろ？俺なんか勝てるワケねえじやねえか」

いや、それこそ無えからー。魔王の方が負ける気満々だからな。

思わず出でた言葉を押しつぶめる。

チツ、めんどくせーな。怖氣つきやがった！

舌打ちしそうになるのを内心で押しつぶして、なんとか宥める。

「大丈夫だつてーお前、二二一年で強くなつただろ？」

正確にはまだ1年も経つではないが、大体、勇者と会って1年位だ。

この1年、オレは自分の副官に勇者の稽古をつかせていた。

オレはそれを見ていはないが、たぶんけよつとは強くなつただろう。

しばらく励ましたやつでしたが、反応はいまいすで、その日は無理やり切り上げ寝る事にする。

次の日、勇者はいなかつた。

オレの宝玉は見たいものを映す事が出来、失せ物探しにつつひつけだ。

勇者はすぐに見つかった。

まだこの街にいるらしい。

食いモノ片手に、なにやら、悩んでいたりしかった。

ひょっこり、自信をつけてやるとするか。

勇者の自信喪失に、少し、心当たりがあつた魔界の将軍デルクバレスは、街を駆け、森に紛れて変異した。

赤色の鱗をもつた巨大な火竜となつたオレは、街へと飛んで少々暴れる。

街は一瞬にして恐慌状態に陥り、逃げ惑う人間や怯え狂う馬などの動物でごった返した。

「ちゅうちゅう」と蟻のように兵士たちが湧き出てきては、矢を放ち槍を突き出し五月蠅く纏わりついてくる。

背中の翼で少し強めに羽ばたくと、ソレは起こつた風で簡単に吹き飛ばされていった。

「オイオイ、この街大丈夫かよ！まあ、オレには関係無いからどうでもいいがな。」

騒ぎの中でも見つけた勇者は、オレに背を向け、こけつまろびつ逃げていた。

普通の火炎も吹けるオレだが、此処は態と魔法の火炎を吹きつける。

勇者を狙つた火炎魔法は、ロッグジェグバの剣の効果で消え失せた。

その事に気づいた勇者は、若干迷ったようではあったが、あらぬ方へと駆けだすと、オレの背後に回つて剣を振るひ。

オレは態と、それをその身に喰らひつてやった。

突如街を襲い、火を吹く竜を、勇者は見事撃退する。

街の兵士や將軍さえも、太刀打ち出来ない巨大な竜を相手取り、深手を負わせて追い払つた勇者を、街の人間は次々に褒めそやした。

勇者の自信も随分回復したようだ。

まったく、魔王並みに単純な奴だな。

己の魔力で瞬く間に怪我を治した魔界の將軍デルクバレスは、何食わぬ顔で群衆から姿を現すと、勇者を魔城へ導いた。

満腹竜の息吹は何処？ グルメを廻る旅の六食（後書き）

此処でちゅうとじ報告。

「ストックが切れました。」

最終話辺りならあるけど、続きを読む書かなきや在りません。

そして、お気付きの方もいらっしゃるかと思いますが、私、今をときめく就活生なのであります。

ウフフ。

「この春卒業です。

まだ決まっておりません。

なので、続きを読む落ち着いてから、といつ事になります。

（我慢できなくて書こちやうかもだけど）

続きを読む

と思われた方は、
ついでに、

「じよたひうが早く良いトコロに就職するよ、お祈りください。これでだよ。」

因みに、此処で言つて『良いトコロ』ところのは、「じよたひう」ひらがんであります。

処といった意味でござります。

ではでは、暫く『2代目勇者の災難』は更新できませんが、皆様お達者で～

(^○^) -

つねり、忘れるところだつた！

私が投稿してこるリレー企画『続きを書きましょう』の更新は続けてまいりますよ～

私、『ペーと貼り付けするだけなのです。

そして、こちらの更新暫くできないとか言つといひ、ちょくちょく私を見かけるかもですが、多田に見てやつてくださいな。

ではでは。

栄華に生きる偉大なる歩み 其の一歩（前書き）

「無沙汰します。

地震続きですけど、皆さん、大丈夫でしょうか？

私の方は、なんかもう、地震に慣れてしましました。

十年くらい前から、ちょくちょく来てましたしね、地震。

今じゃ、日課のように訪れるのだもの。
そりや、慣れちゃつてものよ。

私、神経図太いから良いけども、繊細な人は眠れなくなるから心配
です。

早く、落ち着くと良いなあ。

栄華に生きる偉大なる歩み 其の一歩

一般人には見慣れない不可思議なものでじつた返したその一室は、いつ何時も、何やら不気味な雰囲気を漂わせている。

まともな感覚を持つ常人なら遠巻きに扉を眺める程度のその一室。

しかし、その部屋はある種の者達にとっては輝けるゴートニア。

夢を現実とする、誇るべき作品の詰まつた、素晴らしい我城なのである。

今、その城……もとい一室では、縫れた白衣を身に纏い、田の下に真っ黒な隈を作った者たちが、一画に集まつて密やかな笑いを交わし合つていた。

「部長!遂にやりましたね!..」

「ああ、これで……、此れで!…少ない研究費で遣り繰りしていく苦惱とはすむとぞまだ!…!..!..」

高らかに発せられたその声音は、魔王城理科学研究部、部長のものである。

その顔は、晴れやかに笑つている……のだろうと、長年、同じ研

究者として共に歩んできた仲間達には分かつていた。

例え、笑みを形作るその眼の下に、色濃い疲れが現われていようとも。

例え、笑みを形作るその口元が、蓄積された疲労によつて、引き攣り氣味であるうとも。

彼らには分かつっていた。

アレは、晴れやかに笑つているのだと。

当然である。

何十年という月日を、同じよつた顔をして共に笑い、共に泣いてきたのだから。

分からぬ訳がない。

此処は、魔王城、理化学研究部、研究所。

一般人には見慣れない不可思議なものでごつた返したその一室は、いつ何時も、何やら不気味な雰囲気を漂わせていた。

まともな感覚を持つ常人なら遠巻きに扉を眺める程度のその一室。

しかし、その部屋はある種の者達にとっては輝けるゴーティア。

夢を現実とする、誇るべき作品の詰まつた、素晴らしい我城なのである。

今、その城……もとい研究所に居るのは、縫れた白衣を身に纏い、田の下に真っ黒な隈を作った研究者たち。

彼らは、密かに推し進めていたとある研究開発が成功した事を喜び、部屋の隅で囁き合っていたのである。

もつとも、囁き声であったのは最初の内だけであり、もう既に、『声高に』と表現しても過言ではない程の声量になつてはいたのだが……。

まあ、気にする事は無いのだろう。

まともな感覚を持つ常人は、近寄らんとされしないのだから……。

研究部員たちは、虚ろな目をして笑い合ひ。

見た田とは裏腹に、心の内は晴れやかに。

中でも部長は、長年の悩みからの解放と、心血注いで開発してきたある装置の完成に、湧き出る歓喜を抑えきれないようであった。

ふはは、ハハ、ハアーハツハツハツハツハツハ！－－！－－！

魔王城理科学研究所に、研究部部長の笑い声が響き渡る。

研究部員のアルワス・テーナは、同じ研究所に所属する身として、その、ちょっと他人の振りをしてたい部長に言葉をかけた。

「あの、部長。なんかその高笑い、悪役みたいなんでやめてください

引き攣り顔の部下の苦言も、今の彼には通じなかつた。

ハアーハツハツハツハツハツハ－－－－！

魔王城理科学研究所に、研究部部長の笑い声が響き渡る。

目の中には黒い隈。草臥れた白衣。ぼさぼさの髪。

ハアーハツハツハツハツハツハ－－－－！

血走った眼。臭う白衣。顔に張り付くピンクの髪。

ハアーハツハツハツハツハ――――

今の彼こそ、マッドサイエンティストと呼ぶに相応しい。

彼は腰に手を当て高笑う。

片足で、自身の椅子を踏みつけて。

「ハアーハツハツハツハツハ――――遂に、遂にこの私の偉大なる
研究が――――

魔王城理科学研究所には、研究部部長の高笑いがいつまでも響き渡る……かに思えたが、同じ研究部に所属する研究部員、アルワス・テーナによつてその笑い声には終止符が打たれた。

ゴツッという鈍い音を最後に、騒がしかつた研究所には『惨劇の後』という名の沈黙が訪れたのである……。

栄華に生きる偉大なる歩み 其の一歩（後書き）

『この小説は2ヶ月以上更新されていません』
つていうアレ、あまり付けたくないのです。
付けないよう頑張りますね！

栄華に生きる偉大なる歩み 其の一歩（前書き）

10000円突破しました^ ^

御観覧にしてくださって、ありがとうございます。

(*^-^*)

突破したその日に「裏設定的な落書き」をアップいたしました……が、あれは突然的に上げてしまったもので、その内消しちゃうかもしません。

(逆に増えてるという事もあるかもしませんが)

なんかね、記念的な節日になると、何かやりたくなっちゃうのですよ。

正月とか誕生日とかエイプリルフールなんかのイベント事が大好きなのです。

私、絵を描くのも趣味なのですが、コイツを絵で見てみたいってキャラ、いますかね？

因みに、私が今一番描いてみたいキャラは部長だつたりします。

(ーーー)

栄華に生きる偉大なる歩み 其の一歩

ここは、魔王城理化学研究部、研究所。

一般人には見慣れないだらう実験器具や発明品で満たされたこの部屋は今、身に染まる様な沈黙に包まれている。

別に、無人という訳ではない。

今、研究所には総勢十三名の関係職員達が一堂に会している。

全員が全員、無口という訳でもない。

では何故、この場がこんなにも静けさに満ちているのか。
……疑問の答えも此処にある。

床に広がる赤い液体。

ぼさぼさ髪のピンク頭を血に染めて……、

魔王城理化学研究部部長が、うつ伏せになつて倒れていた……。

一研究職員であるアルワス・テーナは、目の前の魔王城理化学研

究部部長のピンク頭を感情の籠もない田で見降ろす。

彼女の右手には凶器となつたタイリクオオウミガメが、甲羅に首を引っ込めて、その場をやり過げそうとじつとしていた。

研究所のマスコットであるタイリクオオウミガメのリクちゃんは、体重30kgの巨漢を引き摺りのたくた歩く、亀のような不思議生物である。

その身体は堅い甲羅に覆われて、前足は陸亀のそれ、後ろ足は海亀のような形態をしていた。

無論、これで殴られたらひとたまりも無い。

勿論、それで殴られた魔王城理化学研究部部長は……、瀕死の重傷である。

しかし、この場に彼を氣遣つ者は皆無であった。

氣を遣るべきは、この場の人間。

そして、彼女の動向だ！

大切なのは自分の命！

そんな訳で、この場はこんなにも薄ら寒い緊張と沈黙に包まれて

いたのである。

暫しの沈黙の後。

周囲の注目を一身に受けていたアルワス・テーナは、足元にまで届いた血だまりをぴちゃんと跳ねさせると、タイリクオオウミガメのリクちゃんを、そつと床に下ろした。

そして、無表情を一変、いつも通りのあざけない苦笑で顔を上げ、いつも通りの明るい口調で言葉を放つ。

「まったくもう、幾ら待ち望んだ装置を完成させたからって、はしあが過ぎですよ。部長」

彼女はさう言って、既に意識の無い部長へと語りかけ、その腕を驚捆んだ。

「部長もいい大人なんですから、恥ずかしい事しないでくださいよね！」

彼女は尚も語りかけ、長身の部長を無造作に肩に背負いつと、ぴちやり、ぴちやりと血溜まりの上を進む。

研究室の外へと繋がるドアに向かつて歩き始めた彼女は、クルリと首を振り返ると、そばかすの浮かんだ顔でにこっと笑んだ。

「ちょっと、医務室に行つてきますね。皆も徹夜続きで疲れたでし

「う、休憩にしましょ。仮眠でも取つていてください」

優しさ溢れる気遣いに、心和む者は居なかつた。

何よりも、そばかすと共に顔に散つた返り血が、恐ろしくて仕方がない。

故に、「頭を打つた意識不明の重体者をむやみに動かすのは危険だ」と、彼女に教える者も居なかつた……。

背負つた部長の足をズリズリと引き摺り、研究室を出たテーナは医務室へと向かつた。

長く仄暗い回廊を渡りながら、自分の顔のすぐ横にある部長の充血した白目を見て、ふう、と軽く息を吐きだした。

さつきは、部長のあまりにもな浮かれっぷりを見て、思わず殴つてしまつたが、部長の気持ちが分からぬといつ訳ではない。

やつと、完成したのだ。

此処数十年の苦惱がやつと報われる。

その興奮と解放感が部長の理性と羞恥心を吹つ飛ばしたのだとしても、仕方がないのかもしない。

何が悲しくて、あの歳になつてあんな高笑いをしたのかは、テナには到底理解できぬ事ではあつたが、そり、無理にでも理由を付けて納得する事にした。

魔王城理化研究部研究所は、その名の通り、魔王城内で設立・管轄された研究機関である。

主に、魔力やその活用に関わる研究開発を行つているが、物理学や生物学、化学や工学など多岐にわたる分野で多くの実績を上げていた。

研究テーマは、国から否応なく押し付けられる事もあるが、基本は研究職員の自由にできる。研究職員は12人。それぞれ得意分野が異なり、各自で研究テーマを持つてはいるが、ここ近年、研究部員全員が結束して取り組む、あるひとつのテーマがあつた。

『科学技術による魔力生産方法の発明』である。

これまで、魔力が物に宿る仕組みや、自然的に魔力が発生するまでのメカニズムは、長い間謎とされ、多くの研究者たちが挑んだテーマであつた。

それが、約50年前、かなり有力な説が発表された事によつて、魔法化学会を席巻したのである。

もちろん様々な論議が巻き起こり、否定的な論説が呈される事もしばしばだったが、否定をされたことにそれを覆し、その説は信憑性を高めていったのである。

その説は、我が魔王城理化学研究部でも専らの話題になり、何時しかこの説を基に人為的に魔力を造り出そうという試みに繋がったのであった。

成功すれば一大発明である。

「私の地位と名声は鰐登り間違いなし！私は歴史にその名を刻まれ、全世界の凡人に仰がれ敬われるのだ！！」

と、例の如く高笑いを始めた部長を中心に魔王城理化学研究部では、魔力生産方法の確立を目指す事となつたのである。

人為的に魔力を造り出すというテーマは、探究心溢れる研究職員達にとつても魅力的なテーマであつたのだった。

先ほど完成した装置は、この研究を進めるにあたつて無くてはならないものだつた。

長年の研究過程を思い返し、感慨に耽りながらテークは歩みを進めていた。

広大な魔王城の地下2階にある研究所に対して、医務室は地上2階にある。

女性がたつた一人で大の男を背負つて運ぶには長すぎる距離だ。

けれどもテーナは、そんなことをチラとも意に介さずに、平然として階段さえ昇つてしまつ。

地上の階に出れば、そこは地下とは違つて格段に人通りが多い。

通りかかる人々は、大の男を平然と背負い、血に染まつた少女を目で留めては、顔を引き攣らせて目を逸らした。

そして、後に残された引き摺つたような血の痕跡を目にしては、空恐ろしさに身を振るわせるのであつた。

栄華に生きる偉大なる歩み 其の三歩

研究に、犠牲は付き物である。

研究には、膨大な資金と、時間と、労力が必要。

その資金と労力を工面し、知識を集め、試みを行使する事に時間を費やす研究者は、己が手掛ける研究に人生を捧げていると言つても過言ではない。

何者も生きる上で糧を必要とし何かを犠牲にして生きてはいるが、日常的なその犠牲を一々【犠牲】と認識する事はあまりない。

私は、研究職というものの程、【犠牲】といつものと向き合い続ける職業はないと思っている。

家族や友人と過ごす時間を犠牲にして、自らの家財を犠牲にして、研究対象や実験動物の生命と自由を犠牲にする。

時にはその全てが無駄になるという事もまま珍しい事ではないが、それを認知しながらも、【犠牲】を意識しながらも、それを支払い続けるのだ。

その【犠牲】がなければ、如何な研究も成し遂げる事は出来ないのである。

生涯を賭して自らの信念を貫くその生き方を、

その、覚悟を秘めた眼差しを、

私は美しいと思い、惚れたのだった。

医務室に辿り着き、ガチャリとその扉を開く。

中を覗くが、医務員は居ない。

部屋の中は、仕切りこそ無いがその役割^{じご}とになんとなく空間が分かれている。

手前には応接室兼待合室といった風情にソファーが並び、右奥には診察の為の作業机と椅子と機具、左奥には患者を寝かせる為のベットが十数並んでいた。

アルワス・テーナは迷う事無くベットに向かうと、背負った部長を放り投げた。

畳まれていた掛け布団を掛けてやり、溜め息を吐きたい気持ちで部長を睨む。

まつたく、こんなに献身的に吸くしてやつてみると、これがどういふことか。

私の悶々とした想いも知らぬ氣に、部長は白皿を剥いて眠つている。

まつたく、暢氣なものだ。

電圧装置にでも繋いで、どこのまで耐えられるか、試してやりたくなる。

テーナの心の声が聞こえた訳もあるまいに、その時、部長の身体は、ぶるりと震えたのだった。

テーナは部長を眺めながら、ベット脇の椅子に腰かけた。

開いた白皿を閉じてやれば、その寝顔は至極まともで、先程まで莫迦笑いをしていた人物の物とはとても思えない。

ホントに、何でこんな人を好きになってしまったのか。

部長の事を知れば知る程、分からなくなつてくる。

けれど、知れば知る程に深みに嵌まつてしまつている様なのは、氣のせいでは無いのに違いない。

もつと、もつと、と彼の全てが知りたくなつてくるのだから。

……恋と研究は、とても似ている。

そんな事を考えながら、テー^ナは手近な布で、血だらけになつた部長の顔や頭を拭つていたのだが、そんなテー^ナを目撃した隣のベットに伏せる患者は、己が身体を戦慄させた。

彼女の手にするその布は、いつから其処にあるとも知れない台布巾であつたから……。

余談であるが、隣の患者はよくサボリに寝に来る常連であり、彼女らの訪れた医務室の担当医務員が結構な無精者で、台布巾の事など歯牙にもかけない性格なのを知つていたのだった。

しかし、テー^ナにはそんな事は知る由も無く、また、知つていたとしても気にすることなく部長の顔を拭つていただろう。

何週間も着たきりであつた白衣で、顔を拭う事もざらな彼女らにとつては、今更な問題なのである。

研究者といふものは、研究に関わる事のない日常の事物において、時に恐ろしい程無頓着であり、また、目的の為ならば手段を問わない彼女らは、用が成せればそれでいいのであった。

テー^ナは、ガビガビに乾いた布で、部長の顔にこびり付いた血を

ガシガシと削り取ると、その布が台布巾であることに気づき、ふと昔を思い返して溜め息をついた。

徐に自分の服装を見下ろしてみて、再度、今度は何処か諦めたように軽く息を吐く。

適当な服の上に、何年前に洗ったか見当もつかない草臥れた白衣。彼が幾ら無頓着であり、自分と似たような格好で居るとしても、コレでは振り向いて貰えないのも無理はないかも知れないと、今更ながらに気づいたのだ。

少なくとも、研究に携わる前はもう少し女らしい格好をしていたものだったのに。

瞬間、頭を過ぎた思いに、思わず笑いが零れる。

女らしい格好を捨てる切っ掛けとなつたのが、他でもない、部長への恋情だったからだ。

皮肉なものだと思いながら、何処か可笑しくてテークは楽しげに笑つたのだった。

研究者は、己が研究に身を投じ、家族と過ごす時間をも顧みる事がない。

私が研究者にならうと思いつたのは、そんな研究者に惚れてしまったからである。

ともすると研究室に引きこもり、関係協力者にしか会おうともなかつた部長、ルド・エリテスに近付き、関係を保つにはコレしかないよつて思えた。

研究に取り組んでいる最中のエリテスは、真摯で誠実であった。

そのすぐ傍で彼を手伝い、度々彼に名を呼ばれることが今の至福であるが、恋につつを抜かして研究に手を抜く程、私は莫迦では無い。

部長の信頼を得、少しでもその田に留まるよつ、研究への取り組みには全力をつくした。

そして、とつとつと部長の研究を完遂させ、研究に対する執着と興味を尽かす。

それが、今現在の最たる田標である。

『田標の為には、手段は問わない』

それは、うつかり気長に構えて居たら何時になつても恋人になれ

そうもない鈍感な部長に想いを寄せるテー^ナだけではなく、自らの生涯の内に終えるかも分からぬ研究を相手取る他の研究部員達にも共通の気持ちであった。

……其れ故に。

それ故に、私達は、研究の為といつのなら、親愛なる魔王陛下を【犠牲】にする事となつても、特に異論はなかつたのである。

覚悟を持つて歩む道のその先を、私達は知らない。

知らないからこそ、私達は期待と興奮に胸を躍らせ、その道を突き進むのである。

栄華に生きる偉大なる歩み 其の三歩（後書き）

最後の文章、

「覚悟を持つて歩む道のその先を、私達は知らない。
知らないからこそ、私達は期待と興奮に胸を躍らせ、その道を突
き進むのである。」

は、ポジティブ版とネガティブ版、一通りの意味に解釈できます。
さて、魔研の命運は如何に（笑）

因みに、この二歩の話で出てきた研究者々の話は、只の偏見です
ので鵜のみになさりぬよう（注意を）。

几帳面で、綺麗好きで、日常生活を普通に営む研究者の方も多い筈
です。

現在、私は夏バテにやられてグテグテです。
気温差激しいですので、体調などにお気をつけ
では、また。

栄華に生きる偉大なる歩み 其の四歩（前書き）

久しぶりに一ヶ月以内に更新！

今日、ものすつ『ごく暑かったですね。もう昨日だけど。
朝から30度越えなんて信じられない位だけれど、まだ8円半ば。
なんかまだまだ、こんな日ありそうですね。
熱中症に気をつけねば！
皆さんもお気をつけて。

この『二代目勇者の災難』投稿ひとつ分は、携帯表示で2ページ以内っていう拘りがあつたのに……。

この頃さっぱり、守れません。
すっかり開き直ってしまって、今回も3ページ。
いいや、書きたいだけ書いちゃおう

栄華に生きる偉大なる歩み 其の四歩

魔王城理化学研究部研究所では、主な研究対象として魔力を扱っている。

研究を進めるにあたって魔力は無くてはならない存在だった。

資料や実験媒体としては勿論のこと、実験器具や装置の動力も魔力なので、それはもう、膨大な魔力が必要なのである。

研究部員だけでは必要な魔力の百分の一も貽えきれない程の、膨大な魔力が。

足りない魔力は外部から調達するより他になかった。

外部から魔力を調達するには、魔力を宿す者から提供してもらう方法と、魔力が結晶化して固体状となっている【魔結晶】という物質を入手し使用する方法の一通りがある。

前者は人を雇うことで、後者は業者から買い取ることで調達するのだが、どちらの方法にしたって、必要な魔力量に比例して莫大な金が掛かるのだ。

【魔結晶】はかなり希少な物質で需要もばか高く、市場に上がる」と自体が珍しい。

故に、大抵は人を金で雇う事で魔力を提供してもらうのだが、生物に宿る魔力は酷使すればその者が死ぬ危険がある。

かといって大勢から少しづつ調達していってはそれだけで手間も時間も掛かり、それでは肝心の研究が進まないので、多少、命の危険がある事には目を瞑り、魔力量の多い者を数名雇つて絞るだけ絞り取り、ローテーションで休ませる方法を取ることになる。

命に関わる上に長期間拘束する事にもなるので、それだけの大金を積まねば誰も雇われてはくれず、魔王城理化学研究部では常に魔力に飢えていた。

『科学技術による魔力生産方法の発明』を成し得るためには今まで以上に魔力が要る。

けれど、現在の研究費予算だけでは到底魔力が足りずに、最悪、研究 자체を凍結し諦める羽目になるだろ!つ。

予算会議では幾度となく、研究費予算増案書を提出し訴えてきたが、結果は惨敗。

なんとかしなくてはならない。

追い詰められた私達は、予てから田を付けていた魔王陛下に、どう手を出す事を決意したのであった。

私達が喉から手が出る程渴望している膨大な魔力を、陛下は日々垂れ流しにして無駄に持て余している。

嗚呼、なんて勿体ない！あれを使わずにいて何とする…

前々から、部長ルード・エリテスを始め、魔王城理化学研究部に身を置く者達は、陛下の魔力を研究に使いたいと羨んでいた。

しかし、陛下には行うべき執務がある。

研究に使う魔力の提供の為に魔王陛下を拘束し、研究に付き合わせる事は、真の魔王と影で噂される宰相のセズシルバスが許さないだろう。

昨日、完成したばかりの発明品である装置は、設定した対象者の魔力を、対象者の行動や居場所に関係なく、例え対象者との距離が離れていようとも、その装置の使用者が自由に使う事ができるというものである。

つまり、魔王陛下を対象として設定すれば、陛下が何処で何をしていようと、装置の使用者は好きなだけ魔力を頂戴する事ができるのである。

「これで、少ない研究費を遣り繰りしていく苦労とはおさらばだ

！」

足りない魔力の為に研究が進まず、悶々とする日々を送らなく

ても済む…

そんな思いで私たちは笑みを交わし合い、部長は高笑いをしていたのである。

魔力供給源として対象を設定する為には、対象とする者の身体の一部を装置に取り込まなければならぬ。

医務室へと運ばれた翌朝、目を覚ました部長ルード・エリテスは、早速、自ら採取に出掛け、私はそれに付き従つた。

「さて、テーナ君。」

今まで、向かい来る風を切るように廊下を突き進んでいた部長が、突然その足を止めた。

此方を振り向いた部長の深い藍色の瞳が、まっすぐに私を見つめる。

ドクドクと五月蠅い心臓をなだめ、動搖した事を悟られぬよう、まっすぐ部長を見返した。

「今から陛下を構成する体細胞の一部を採取しに行こうと思つてゐるのだが、何処へ向かえば手に入るだろうか？」

部長は天才的な研究者である。

けれど、部長は研究熱心なあまりに他の事への興味がなく、研究以外の事についてはからつきの駄目駄目っぷりであった。

陛下が居る所など簡単に見当が付く。城の者なら、それも裕に百年以上も城に仕えている者ならば、知つていて当然のそんな事でさえも、部長ルード・エリテスは知らなかつた。

アルワス・テーナは、未だ鳴りやまない心臓に、気が氣ではなかつたが、なんとか部長の問いに答える。

「そうですね、陛下に気付かれる事無く体細胞を採取するとすれば、陛下の私室で、落ちてる毛髪でも探しればいいんですけど、さすがに私達が陛下の私室に出入りする事などできませんし……。私達でも立ち入れそうな場所で陛下が居る所となると、謁見の間ぐらいだと思います。陛下が謁見の間を離れている間に玉座などを調べてみるといいかもしません」

ちょっと声が上ずつて、若干早口になってしまったような気がする、そんな説明にも、部長は何か勘づいた様子も無い。

「ちょっとは気付いてくれつたつていいのにー！

理不尽な事は分かつていながらも、部長に対してもつつきを覚えた、その時

「陛下の身体の一部など、何に使おうとこうとです？」

後ろから降つて湧いた、何気ないその声に、ザツと血の気が引くのが、自分でも分かつた。

その場で凍りついたように固まつた、そんな私の様子にも、鈍感な部長は何ひとつ気付いた様子も無く、私の背後に居る人物に向かって馬鹿正直に答えてしまう。

「ハツハツハ、知りたければ教えてやろう。私の発明品が昨日、遂に完成してね。陛下の身体の一部さえあれば、陛下が何処で何をしていようとも、好きなだけ陛下の魔力を利用できるのだよ」

影の魔王と囁かれるその人物のその顔は、……部長だつて、知っている筈であつたのに。

部長は天才的な研究者ではあつたが、研究以外の事に対してもからつきしの、駄目駄目っぷりなのであつた。

振り向きたくない。

振り向きたくないけれど、自分よりも上の立場の者に、いつまでも背を向けている訳にはいかない。

私はギギギツと音がしそうな程のぎこちない動きで、固まつた身体を振り向かせ、後ろの人物と向かい合つた。

そこには

「ほひ、それは素晴らしい発明ですね」

そこには、にこやかな笑みを浮かべる、魔界の宰相、セズシルバスの姿があった……。

終つた……。

栄華に生きる偉大なる歩み 其の四歩（後書き）

恋愛小説、読むのは凄く好きだけど、書くのは苦手。

恥ずかしくて、ぐおおおって悶えながら書いてるのですよ。

その割にぬるいですが。

うぐふあ！つて血反吐吐きたくなる気持ち、分かる人にうつしゃるでしょ？

そんな訳で、つていう訳でもないけれど、「栄華に生きる偉大なる歩み」は次で最後です。

ホントはこの栄華の歩みは、部長視点で書こうと思つていたんですよ。

恋愛なんて欠片も絡まず、始終、あの高笑いなテンションで。

男性陣ばかりで主要な女の子一人しか居ねーじゃねえか！

つてことで、女の子増やして、視点変えてみた訳です。

お気付きの方もいらっしゃるかと思いますが、この『二代目勇者』、話題に「食」だと「眠り」だとテーマがある事があります。今回のテーマは「研究」と「野心」、そして「歩み」。

其処に、視点を変えたつこで気紛れに恋愛要素入れてみたのですが、結果、

うぐおおおおおと悶えながら書く破田に。

生温かい田でもいいので、ビーナ見守つてやつて下をこまし。

栄華に生きる偉大なる歩み 其の五歩

魔王陛下を【犠牲】にするといつても、そんなに大した事をする訳ではない。

情けなくとも魔王陛下。

腐つても王様があるので、危害を加える様な真似は、絶対にばれない様に入念な細工を施してから実行すべきである。

今回のケースについては、犠牲という言い回しは大げさだったと訂正しよう。

私達はこいつそりと、陛下の在り余る魔力を少々拝借しようとしていただけなのだ。

多少の危険があつた事については、生きてる間には付き物なのでご寛恕願いたい。

決して、陛下に対する害意が有つた訳ではないのである。

そんな言い訳が頭の中を咄嗟に過るが、凍つたように固まる私は声を出す事すらも出来ない。

後から冷静になつて振り返つてみれば、その言い訳には余計な事

も多分に含まっていたから、言葉に出来なくて良かつたんだろうけど、声も出せずに固まっていた私には、目の前で余計な事を喋りまくる部長を止める事だつて、出来はしなかつたのである。

私が茫然と固まっている間にも、部長は宰相に問われるがまま、発明品の名称から使い方、形状、材質、仕組みや理論。果ては現在の保管場所までをも教えていく。

部長は研究熱心な馬鹿であつたが、私は恋に盲目となつた間抜けであつた。

此処は廊下のど真ん中。

それも地上階で一番広く通行人の多い中央通路であり、今も、二十人は並んで通れそつたこの廊下を、多くの者達が行き交つている。

こんな場所で、あんな話をするべきでは無かつた……。

「では、その発明品は今日の午後にでも、私の方まで提出に来て下さい」

一通りの話を部長から聞き出した宰相閣下は、清々しい笑顔でそう宣つた。

部長は鳩が豆鉄砲を食らつた様な顔をしてい。

「は？ 何故私の発明品を渡さなければならぬ」

「その発明品は国の予算で作られたのでは？」

「違う、コレの材料費や研究費は研究所に属する部員らでそれぞれ出し合つて賄つたものだ！」

宰相の問いに強氣で反論する部長。

彼に見つかつた時点で、全ての希望は風前の灯となつて消える運命にあると云うのに……。

「そうであったとしても、先程聞いた話から察するに、それは国家予算によつて研究設備が整えられた研究室で作られたのでしょうか？ 何より、貴方方研究者との契約書には、『研究基盤を整え毎月契約金を支払い生活を保障する代わりに、魔王城理化学研究部研究所に所属している間の研究成果は全て、魔王城全体の為に、魔王城中枢機関の決定に基づいて利用される』旨が記されておりましたが？」

『何百年も昔にサインした契約書の内容など、憶えているのはこの宰相くらいではないだろうか。

『何か問題でも？……ある筈がありませんね』

そう言外に告げて来る宰相の微笑みに、部長の反論は完膚なきま

でに叩き潰され、敢無く発明品【魔法の杖】は、宰相セズシルバスの手に渡る事となつたのである。

あれの費用で魔力提供を受けて本命の研究を進めていれば良かつた……。

どうせ取り上げられるなら、自腹で製作なんかしなかつたのに……。

茫然自失となつた私達に、宰相閣下は告げる。

「ああ、研究成果を上げた際の特別手当に関しては、契約に基づききちんと支給されるので安心してください。では、また後ほど

【魔法の杖】の研究製作費に比べたら、特別手当など雀の涙ほどしかない。

慰めにならない言葉を掛けて、宰相閣下は部長の横をすり抜けていく。

ところで、私達、魔王城理化学研究部の部員には、夢中になるとその他の事があまり目に入らない、目に入ったとしても特に気にならないという困った性質があつた。

宰相セズシルバスが私達の横を通り過ぎて何歩も進まない内に、「部長～、アルワスさん」という何とも情けない声の叫びが聞こえた。

呼び声に顔を向ければ、此方に走り寄るのは魔王城理化学研究部にして歴代最年少の研究部員メテセール・ウェルノット君である。

彼は顔面を蒼白にして、息せき切つてふりつきながらも報告する。

「大変ですっ！第一種絶滅危険魔獸達が、城外へと逃げだしてしました！」

田頃からよく通る、声変わり前のその声を、廊下中に響かせながら。

その報告に、胃の腑の冷える、思いがした……。

絶滅危険魔獸とは、その名の通り、絶滅の危機に瀕する希少な魔獸達のことであり、他の種族を絶滅の危機に陥れる危険な魔獸達の事である。

生態調査や魔力研究の為に、研究所の職員達で管理・保護をしていたが、ここ数日（いや、一週間？）程は、【魔法の杖】が完成間近となつて研究が佳境に入り、……誰も世話をしていたかったかもしない、と思い当つた。

中でも、第一種というのは希少度も危険度も最高ランクに高い事を示す分類であり……、嗚呼、頭が痛い……。

今日ははとんだ厄日である。

我が研究所のマスコット、タイリクオオウミガメのリクちゃんも、第一種絶滅危険魔獸に認定された希少で危険な魔獸であった。

何故あの時、特殊ケージの中に居る筈のリクちゃんが、掴み易い手近な位置に居た事を疑問に思わなかつたのだ奴う。

後悔先に立たず。

後ろを振り返りたくないと思いつつも、報告の義務がある為に、振り返らない訳にもいかない。

ギギ、ギ、と音がしそうな程のぎこちない動きで振り返れば、やはりというか其処には、魔界の宰相セズシルバスの姿があつて……、

顔に浮かべたその笑みは、目が、笑つていなかつた……。

嗚呼、終つた……。

同時刻、魔王城西に広がる魔空樹海には、ひとりの人間が入り込んでいた。

魔空樹海とは、魔区と魔区外との境にあたるゲセドゥル山脈に広がる特殊森林域である。

空間自体に魔力が深く染み付いていて、古くから、異様な成長進化を遂げた野生魔生物が跋扈する無法地帯となっていた。

太い樹木が巨大な蛇の如くにつねり、絡み合い、空をも地面をもその男の目前をも覆っている。

唯一の細い道を頼りに、男は突き進んでいた。

視界の悪いその場所で、何も知らずに男は歩く。

否、何も知らないからこそ、男はその道を歩んでいたのである…。

広大な魔空樹海の奥深く、男の悲痛な叫びが響く。

……その場所には今、逃げ出した絶滅危険魔獣たちの多くが潜み彷

徨っていたのであった。

助けを求めるその声が、新たな獣を呼び寄せる。

……その事を、男は知らない。

知らないからこそ、男は叫び続けるのである。

男の悲痛な叫びは、いつまでも響き渡る……といつ事も無く、まもなく、その叫び声には終止符が打たれた。

……魔王城理化学研究部研究所のマスコット、第一種絶滅危険魔獣のリクちゃんによつて、

騒々しかつた魔空樹海には、『惨劇の後』といつ名の沈黙が訪れたのである……。

栄華に生きる偉大なる歩み 其の五歩（後書き）

『アーメン。』

つて最後に入れたかった……。

この「栄華に生きる偉大なる歩み」の話。

このサブタイトルを思いついた時点で、五歩までと決めていました。

「三歩進んで、二歩下がるうー」（合わせて五歩）

というフレーズに引っかけて（— * ）

宰相に出くわして歩みに影が差すのも、四歩田からになるよう調整したのです。

進んでも退いても近付いても遠ざかっても、

栄華に生きる偉大なる歩みのその一歩。

負けるな魔研！

三歩の後書きで言っていた『ネガティブ版の解釈』。

素直な人には分からなかつたかも知れませんが、この五歩の後半で分かるかと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7952p/>

2代目勇者の災難

2011年8月26日07時49分発行